

北陸自動車道

埋蔵文化財発掘調査報告書

蜘蛛ヶ池遺跡

1981

新潟県教育委員会

北陸自動車道  
埋蔵文化財発掘調査報告書

蜘蛛ヶ池遺跡

新潟県教育委員会

## 序

昭和47年以来、県教育委員会は、北陸自動車道の建設に伴ない、埋蔵文化財の発掘調査を日本道路公団と協議を進めながら実施してきた。北陸自動車道の新潟から長岡までは昭和53年に、長岡から西山までは昭和55年に部分開通し、西山から上越間は完成を目指して着々と工事が進み、今や新潟県は高速時代を迎えるとしている。

本書は、北陸自動車道建設に伴ない、新潟県教育委員会が、日本道路公団の委託を受けて実施した、中頸城郡大潟町内に所在する伽ヶ池遺跡の発掘調査の記録である。

この調査により、砂丘地における郷土の先人たちの生活や文化の一端を明らかにすることができた。本県においては、砂丘地における考古学的研究は、まだ日が浅いことから、本調査の成果が今後の関連分野の研究を進めるうえに一つの方向づけが得られたとすれば、意義深いものである。本書が広く研究の一助となればと願うものである。

なお、本調査に多大なる御協力・御援助を賜わった地元大潟町及び大潟町教育委員会並びに町民の方々、また、計画から発掘調査実施に至るまで、格別の御配慮を賜わった日本道路公団に対し、ここに深甚なる謝意を表する次第である。

昭和56年6月

新潟県教育委員会

教育長 久間健二

## 例　　言

1. 本報告書は新潟県中頸城郡大潟町大字鯉ヶ池字観音山外に所在していた鯉ヶ池遺跡の発掘調査の記録である。発掘調査は北陸自動車道の建設に伴ない、新潟県が昭和55年度に日本道路公団新潟建設局から受託して実施したものである。
2. 本遺跡の発掘調査は新潟県教育委員会が調査主体となり、昭和55年10月6日から昭和55年11月15日までに実施したものである。
3. 遺物の整理・復元作業は県教育庁文化行政課の職員があたった。
4. 発掘調査に伴う出土遺物の注記は小字名の「観音山下」からKNとし、グリッド名・層位を併記した。
5. 発掘調査による出土遺物は一括して県教育委員会が保管・管理している。
6. 遺構・遺物の実測、写真撮影及び挿図などの作成は、戸根与八郎・坂井秀弥・齊藤基生・田辺早苗があたった。なお、土器実測図の断面は、縄文土器以外（磁器を除く）は黒ぬりで示した。
7. 本報告書の執筆は発掘担当者を中心にして分担執筆をしたもので、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ-1・3を戸根が、Ⅴ-1・Ⅵ-2を田辺が、Ⅴ-2を斎藤が、Ⅴ-3・Ⅵ-2を坂井が執筆した。
8. 発掘調査にあたり、参加者ならびに大潟町の温かい御支援と御協力を賜わった。また、日本道路公団新潟建設局上越工事事務所から種々の御配慮を賜わったことを記して感謝の意を表する次第である。
9. 本報告書の作成にあたり下記の諸氏から御教示を賜わった。(敬称略)

奥田直栄、岡本郁栄、長谷川　正

## 目 次

I 序 説	1
1. 調査に至る経緯	
2. 発掘調査の経過	
II 遺跡の環境	5
1. 周辺の地理的環境と遺跡の立地	
2. 古代・中世の歴史的環境	
3. 大潟町周辺の遺跡	
III 発掘調査	10
1. グリッドの設定	
2. 土層と遺構・遺物	
IV 遺構	12
1. 掘り込み状遺構	
2. ピット	
3. 溝状遺構	
4. 火葬骨埋納穴	
V 出土遺物	17
1. 繩文土器	
2. 石器	
3. 歴史時代の遺物	
VI 総括	35
1. 新潟県内の砂丘遺跡	
2. 遺構・遺物について	
3. まとめ	

## 図 版 目 次

- 図版第1図 遺跡近景（東から）、遺跡近景（西から）  
図版第2図 遺構全景（南東から）、1号溝、2号溝、ピット  
図版第3図 ピット、火葬骨埋納穴、遺物出土状態  
図版第4図 発掘完了後近景（東から）、発掘完了後近景（北西から）  
図版第5図 遺跡北側崖面（西北から）、崖面部分（西から）、崖面部分（東から）  
図版第6図 繩文土器  
図版第7図 繩文土器  
図版第8図 繩文土器  
図版第9図 繩文土器・垂飾品  
図版第10図 石器  
図版第11図 須恵器・土師器・金属器・その他  
図版第12図 中世陶器  
図版第13図 近世陶器  
図版第14図 近世陶磁器・その他

## 挿 図 目 次

- 第1図 周辺の遺跡分布図.....4  
第2図 周辺の地形.....5  
第3図 大湊町周辺の遺物.....8  
第4図 グリッド設定図.....9  
第5図 小グリッド名稱図.....10  
第6図 土壙柱状図.....10  
第7図 遺物の分布密度.....11

第 8 図	掘り込み状造構	12
第 9 図	造構全測図	13
第 10 図	ビット	14
第 11 図	溝状造構	15
第 12 図	火葬骨埋納穴	16
第 13 図	出土遺物(縄文土器)	18
第 14 図	出土遺物(縄文土器)	20
第 15 図	出土遺物(縄文土器)	22
第 16 図	出土遺物(縄文土器)	23
第 17 図	出土遺物(垂飾品)	23
第 18 図	出土遺物(磨製石斧)	25
第 19 図	出土遺物(局部磨製石斧・打製石斧)	27
第 20 図	出土遺物(磨石・凹石・石皿)	29
第 21 図	出土遺物(石錘・その他)	30
第 22 図	出土遺物(土師器・瓦窓器・中・近世陶磁器)	32
第 23 図	出土遺物(中・近世陶器)	33
第 24 図	出土遺物(提子)	34
第 25 図	出土遺物(手斧・釘・鉄環)	34
第 26 図	出土遺物(錢貨・土錘)	34

### 表 目 次

表 1	ビット計測値一覧表	39
-----	-----------	----



# I 序 説

## 1. 調査に至る経緯

北陸自動車道は新潟市から長岡市を経て、日本海に沿って富山・石川・福井の各県を通過し、滋賀県の米原町に至る総延長478kmの道路で、日本海沿岸地域の交通の円滑化と関係地域の開発を図ろうというもので、裏日本の幹線道路としてその役割は極めて大きいものといえよう。この大プロジェクトに対し、県教育委員会は昭和45年8月に新潟～長岡間の埋蔵文化財包蔵地の調査を地元研究者に依頼して調査を実施し、この結果にもとづいて日本道路公团と法線協議を行なった。

昭和46年、県教育委員会は長岡～上越間にについて中村孝三郎・金子拓男・室岡博・花ヶ前盛明の各氏に埋蔵文化財包蔵地の分布調査依頼をしている。この調査では総計54遺跡確認されている。翌47年には長岡～上越間の法線発表が行われ、日本道路公团東京建設局長岡工事務所長から幅2kmで自動車道通過予定地の遺跡分布調査依頼が県教育委員会にあった。県教育委員会は再度遺跡分布調査を実施し、昭和47年10月に柏崎～上越間の分布調査結果を東京建設局長岡工事務所長へ文書で回答した。これら2回にわたる分布調査にもかかわらず、今回発掘調査を実施した御ヶ池遺跡はまだ発見されていなかった。昭和54年になると北陸自動車道の工事も着々と進み、中頸城郡柏崎町～大潟町間の工事も順調に発注され、土砂の搬出入について工程上問題が出てきた。そこで県教育委員会は文化財と工事等の調整を図るために、再度大潟町内の砂丘地、延長5.1kmの法線内に限って分布調査を実施することになった。調査の方法は表面採集・ボーリング調査・崖面の観察などを主とし、7月16日～7月18日までの3日間にわたって調査を実施した。この結果、遺物が散布し、遺跡と判断される地点4カ所、遺物が出る可能性のある地点3カ所であった。この調査結果を9月22日付けの文書で日本道路公团新潟建設局長あてに通知した。更に、県教育委員会は11月14日～16日までの3日間にわたって、合計7カ所について、バックホーを用いて試掘確認調査を実施した。この試掘確認調査でさらに地点はしおられ、遺物包含層や遺構が存在するのはスティション554.20～554.60km付近1地点（大潟バーキングエリア予定地）のみとなった。この地点については大字名をとって「御ヶ池遺跡」と命名した。本遺跡は地表面下約1.5～2m下にあって、大部分が過去における砂採取によって基盤層の赤褐色粘土層が露呈していた。断面観察によれば、現地表面下1.5mで茶褐色粘質砂層（遺物包含層）が約20cmあり、すでに削平された地域では小ピット等が確認された。遺物は削平された地域に散布していたものの、縄文土器であるが細片となっているため時期等は把握されなかった。バーキングエリアの東から南側は自然保安林として現状のまま残る予定になつていい。

るため、調査対象地域は南北 20m、東西 35m の 2,450m<sup>2</sup> を調査対象面積とした。

県教育委員会は本遺跡の取扱いについて昭和55年1月、日本道路公団新潟建設局と協議・調整を行なった。県教育委員会は今年の10月から発掘調査を実施することにし、それまで工事等については極力遺跡地を回避するとともに諸手続をこれまでに全て完了するということで了解点に達した。8月下旬県教育委員会は関係諸機関と最終的事務打合せを行なった。

## 2. 発掘調査の経過

本遺跡の発掘調査は、新潟県教育委員会が発掘調査主体となり、県教育庁文化行政課の職員を中心し、地元考古学研究者を調査員に依頼して協力を得た。また、地元の有志の方々には作業員として多大なる協力を得た。当初、本遺跡の発掘調査は、昭和55年10月6日から11月18日までの44日間の予定であったが、計画より仕事が早く進行したため11月15日に発掘調査はすべて完了した。最終的発掘面積は 3,612m<sup>2</sup> である。

発掘調査に際しては、調査対象地が現地表面下 2~4 m をはかるため、遺構・遺物がどんな状態であるのか全く不明であった。このため表土から茶褐色粘土層までについては再度トレンチ法で確認し、この結果にもとづいて新たにグリッドを設定することにした。発掘は分層発掘をすることにし、遺構・遺物の存在により周辺グリッドの拡張および全面発掘に切り替えていくことにした。なお、土砂の移動については機械を重点的に使うことを前提とした。

### 調査日誌抄

10月6日は発掘用具の搬入を現地プレハブ事務所へ行う。7日は遺跡の現状写真撮影を行ない、採砂場にはさまれた地域と南側の一部の草刈を行う。

10月8日には調査の諸準備が完了したので、調査員・作業員が事務所に集合した。調査の方針や庶務的事項の説明を行なった後、実質的発掘調査に着手した。最初に採砂場にはさまれた地域に幅 2m、長さ 10cm のトレンチを南北方向に 6 本、10mごとに設定した。トレンチは東から西へ 1 トレンチ・2 トレンチと呼称することにした。13日までに各トレンチの状況が把握された。基本層序は上から茶白色砂・茶褐色粘質砂・黒色粘質砂・赤褐色粘土となり、遺物は茶褐色粘質砂及び黒色粘質砂から繩文土器・フレーク・中世陶磁器片が散発的に検出された。しかし、5・6 トレンチでは現地表面下 2.5m まで掘り下げても茶褐色粘質砂は確認されず、おそらくもっと下にあるものと思われた。砂が削れやすいこともありこの 5・6 トレンチは作業の途中で放棄した。これまでの段階では遺物包含層が確実に判明したものの、遺構としては 4 トレンチでピットが確認されたにすぎなかった。調査員が今までのデーターを検討した結果、遺跡のあり方を追求しなければならないという結論に達し、14・15日にはブルトーザーで茶褐色粘質砂上面までの排土を行なった。

10月15日にはグリッドの基準杭の打設を行なった後、ベルトコンベヤーを使って全面発掘に

着手する。B1・C2の大グリッドから始める。B1ではピット2～6が検出される。いずれも茶白色砂が詰まっており、遺物は1点も検出されなかった。C2では小ピットが検出されたものとまとめていす建物跡の柱穴としては問題が残った。また、C2の北側では落込み状遺構が、西側では南北に走る溝(1M)が検出された。遺物は茶褐色粘質砂中から縄文土器・石器(石斧・石錐・磨石)・中世陶器などが混在して出土している。茶褐色粘質砂の下の黒色粘質砂からも若干の縄文土器が出土している。

10月21日にはB2・C3の大グリッドに着手する。B1・B2に比して遺構・遺物も少なく、大半が過去における採砂によって削り取られたものと思われた。しかし、遺物は散発的でB1・C2と同様である。C3-14で人骨を埋納したピット(B4)が検出される。C3の西側では南北に走る溝(2M)が検出され、この周辺から中・近世の陶器類が出土したことが注目された。10月27日ころから天候が急速に悪化し、グリッド内は降雨のため底い所は満水となり排水に追われながらの作業になった。B3・C4の大グリッドでは遺構というべきものは検出されない。遺物は散発的に茶褐色粘質砂から出土するが黒色粘質砂からはほとんど出土しなくなつた。11月8日にはBライン北側の崖面をバックホーを使って確認を行う。

11月10日から13日までは雨の中にもかかわらずA2の大グリッドに着手するとともに各グリッドの補足調査を行う。A2-4の斜面では提子と擂鉢が茶褐色粘質砂上から出土する。A1の北側斜面からは他のグリッドに比較して出土遺物が多い。遺構としてはA2-4でピットが1個確認された。13日には予定どおり現場における発掘作業が終了した。

11月14日には調査用具などの水洗いや出土遺物の梱包を行う。15日には現場作業がとどこおりなく終了したので器材・用具の撤収を行なつた。

なお、本遺跡の発掘調査は下記の体制で実施した。

調査主体	新潟県教育委員会	(教育長 久間龍二)
総 括	南 義 昌	(新潟県教育庁文化行政課長)
管 理	石 山 欣 弥	(新潟県教育庁文化行政課長補佐)
調査指導	金 子 拓 男	(新潟県教育庁文化行政課埋蔵文化財係長)
調査担当	戸 根 与 八 郎	(新潟県教育庁文化行政課学芸員)
調査員	藤 卷 正 信	(新潟県教育庁文化行政課学芸員)
	坂 井 秀 弥	(新潟県教育庁文化行政課嘱託)
	室 岡 博	(新潟県文化財保護指導委員)
協 力	大潟町教育委員会	
事務局	近 藤 信 夫	(新潟県教育庁文化行政課副参事)
	飼 子 山 隆	(新潟県教育庁文化行政課主事)
	伊 藤 和 子	(新潟県教育庁文化行政課主事)



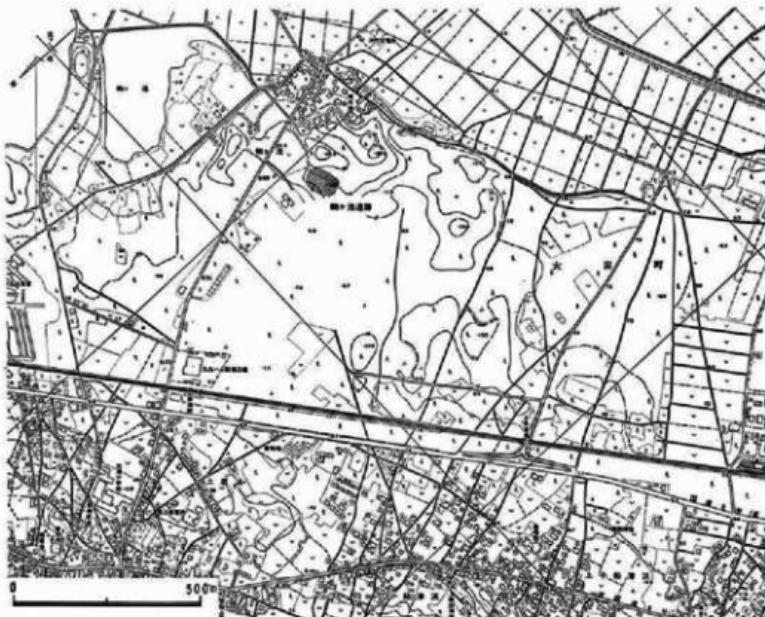
第1図 周辺の遺跡分布図

1. 銀屋町遺跡
2. 大久保遺跡
3. 本崎城跡
4. 出羽道跡
5. 長峰遺跡
6. 長峰城跡
7. 蛇池遺跡
8. 内福子神社裏遺跡
9. 朝日池々底遺跡
10. 里敷削遺跡
11. 古新田遺跡
12. 卷遺跡
13. 丸山道跡
14. 西ノ畑遺跡
15. 長峰道跡
16. 戸々島遺跡
17. 櫻ヶ池遺跡
18. 九戸浜遺跡
19. 下小船津浜道跡
20. 道光寺浜遺跡
21. 福島城跡
22. 江島遺跡
23. 荒田削道跡
24. 江島神社道跡
25. 古宮館跡
26. 中島ふるやしき跡
27. 田尾城跡
28. 路法寺城跡
29. 茶臼山城跡
30. 中島遺跡
31. 十三塚
32. 茶ヶ崎塚群
33. しらみ塚
34. 額日寺跡
35. ふるかんどう塚跡
36. 天王廟遺跡
37. 塔ヶ崎道跡
38. 宮日道跡
39. 離金城跡

## II 遺跡の環境

### 1. 周辺の地理的環境と遺跡の立地 (第1・2図、図版第1図)

高田平野は新潟県の南西部にあって、平野の東側には新第3紀層によって形成された関田山脈が北東から南西に走っており、平野の付近では標高200m以下の中平な丘陵状の地形をし、西頸城丘陵・東頸城丘陵と呼ばれている。平野付近の丘陵はかなり複雑な起伏を示し、特に吉川町の原之町付近の山麓線の出入りはアリアス式海岸を思わせるように顕著である。北東から南西に走る海岸線は直線的で、直江津から柿崎までは砂浜海岸、柿崎から柏崎までは岩石海岸となっている。砂浜海岸の長さは約20kmで、これに沿って砂丘が発達し潟町砂丘と呼ばれている。砂丘の表面はかなり起伏に富んでおり、信越線の潟町駅付近が最も高くて標高約40mを測る。その幅も潟町付近から上下浜駅までの間が最大で、2.5kmから3kmにおよぶ所もある。砂丘と丘陵の間に標高5mから6mの沖積地が発達している。かって大潟などの広大な潟湖が存在



第2図 周辺の地形

していたが、江戸時代から数回にわたる開発によって現在は美田になっている。沖積地の北側には蛇行しながら柿崎の南側で日本海に注ぐ柿崎川が、南側には飯田川などの中小河川を合流した保倉川が複雑な蛇行をくり返しながら西流し、直江津付近で高田平野最大の荒川に合流して日本海に注いでいる。さらに砂丘の背後には北から長峰池、犀ヶ池・朝日池・鶴ノ池・天ヶ池・鯛ヶ池などの湖沼群が並んでいる。

潟町砂丘を詳細にみてみると砂丘の幅は最低約500mから最高2.5km(潟町付近)、最も高い所が潟町駅付近で標高約40mを測る。標高30m以上は極めて少なく、20m以上でもそのほとんどが海岸線の中心より北東寄りの土底浜駅から上下浜駅付近に分布している。この付近では標高20mから25mの比較的平坦な地が続いている。土底浜より南西側の砂丘は海岸側で10mから20mと高くなっているが、内陸側では幅1kmから1.5kmで、標高5m前後の平坦地が幅広く分布し、砂丘の発達は悪い。砂丘全体としては海岸線に平行しているが、土底浜から北東部では大体東西方向に無数の小さな尾根が走っており、この尾根と尾根にはさまれた谷に前述した湖沼群が存在している。潟町砂丘内部には赤褐色の粘質土があって、この層を境にして軟砂層(上部)と硬砂層(下部)とに区分され、軟砂層は新期砂丘砂層、硬砂層は潟町砂層と呼ばれている(高田平原団体研究グループ 1965)。潟町砂層はリス・ウルム期の海退に伴って形成されたものと考えられ、古砂丘IとIIに区分されている(新潟古砂丘グループ 1967)。赤褐色の粘質土の層厚は所によって異なるが、大略0.4m~1.7mで埋積面は大体地形に支配されて地表起伏に沿っている。新期砂丘砂層は新堀川から荒川河口一帯では厚く、新堀川以北では薄く堆積している。新期砂丘砂層は海岸に面した丘の斜面や起伏の凹地には厚く、最大層厚は30mから40mを測る。内陸側に面する傾斜地や内陸近くではその埋積は薄くなり、潟町から上下浜間の小高い所では新期砂丘砂層がうすくるかまたは欠け、潟町砂層の上に赤褐色粘質土と腐植土が堆積している。

本遺跡を現地形図の上にのせると第2図のドットをおとした位置にあたる。現地形は新期砂丘砂層におおわれ、瑞天寺裏山(標高26.2m)から北西に緩く傾斜する斜面上にある。元来この砂丘は東西に長く続いており、東側および北側は高度を減じて標高7m~8mの平坦地が続いている。西側は順次高度が減じて凹地状をなしている。南側は犀ヶ池の集落をはさんで沖積地に接している。天ヶ池と犀ヶ池にはさまれた畑地では新期砂丘砂層は見られず、古砂丘上面の赤褐色粘質土上面の腐植土が露呈し、畑地として利用されている。本遺跡の立地を第9図の等高線から復元すると、東南から西に走る古砂丘の頂部に位置し、北東側は南西側に比して急な沢地となっている。南西側は緩かに傾斜している。また北西部は急な崖によってたらち切られている。これらから本遺跡は標高13mから14mを測る北西から南西に伸びる馬の背状の南北傾斜面に営まれていたといえよう。発掘調査対象地の地籍は中頸城郡大潟町大字犀ヶ池字觀音山下215~221、224、225、228、229、231~237番地である。

## 2. 古代・中世の歴史的環境

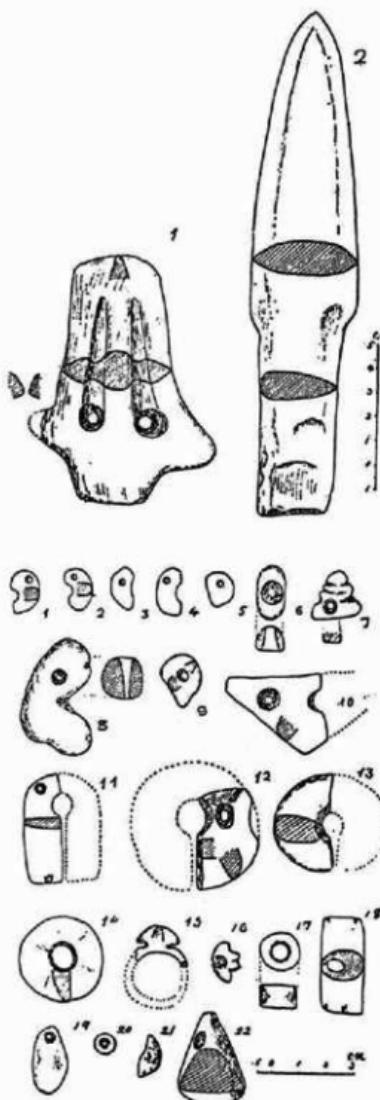
本遺跡の所在している大潟町は律令時代にあっては頸城郡の中にあって、その範囲は現在の上越市を中心とする中頸城郡・東頸城郡・西頸城郡と考えられている。『倭名類聚抄』によれば、本郡には沼川・都宇・栗原・厚木・板倉・高津・物部・五公・夷守・佐味の10郷があったといわれている。小田島充武の『越後野志』に「佐味郷の廃されて佐味荘存す。其の潟町駅の旧名犀潟なり。方言に沼沢という鴻、即ち佐味潟なり。後涸れて田となる」という。図を按するに潟町・土底浜・直海浜・柿崎・鉢崎の数十邑に亘るは其の故区なり。』吉田東伍の『大日本地名辞書』は「現大潟町の大字犀潟および犀ヶ池の名称が佐味から転化したものとして、佐味駅を大潟町の中心集落である潟町に比定している。また、『訂正越後頸城郡誌稿』には「佐味郷は米山麓にて柿崎・八崎・笠島等の沢を言ならんか。」とある。佐味荘が史料上に出てくるその初見は『吾妻鏡』の文治2年3月12日の条で、鳥羽十一面堂領となっている。佐味荘の文献からの追求は大場厚順・花ヶ前盛明によって進められ、文治2年以後の領主の変遷はあったものの文安4年以降の史料に見えない所を見ると戦国時代には入ると間もなく消滅してしまったものであろうとし、その位置について史料に出てくる限りでは、現柿崎町の柿崎・川井・下条・高寺・吉川町の頸法寺・竹直・赤沢で、柿崎町から吉川町にかけて存在した比較的大きい荘園であったと考えられている(大場・花ヶ前 1976)。また、平野団三は現段階で史料の提示はしていないが、「単に竹直・赤沢の部落だけではなく、佐味郷は大潟の潟東側周辺で、現在の柿崎町・吉川町・頸城村の一部がそれである。」と述べ、大潟町・頸城村までを含めるという(平野 1969)。いずれにせよ佐味郷と佐味荘の範囲は一致するのか否か定ではないが、佐味荘は平安末期から室町時代後半まで存在していたことは事実である。また、『延喜式』によると頸城郡の中に佐味駅が置かれていることから佐味郷は古代の交通上の要所にあたり、古代から頸城郡でも大きな位置を占めてきたものと思われる。佐味郷あるいは佐味荘の範囲等については、古来から諸説があって推定の域を出ないのが現状で、今後の調査・研究に期待するところが多い。

## 3. 大潟町周辺の遺跡

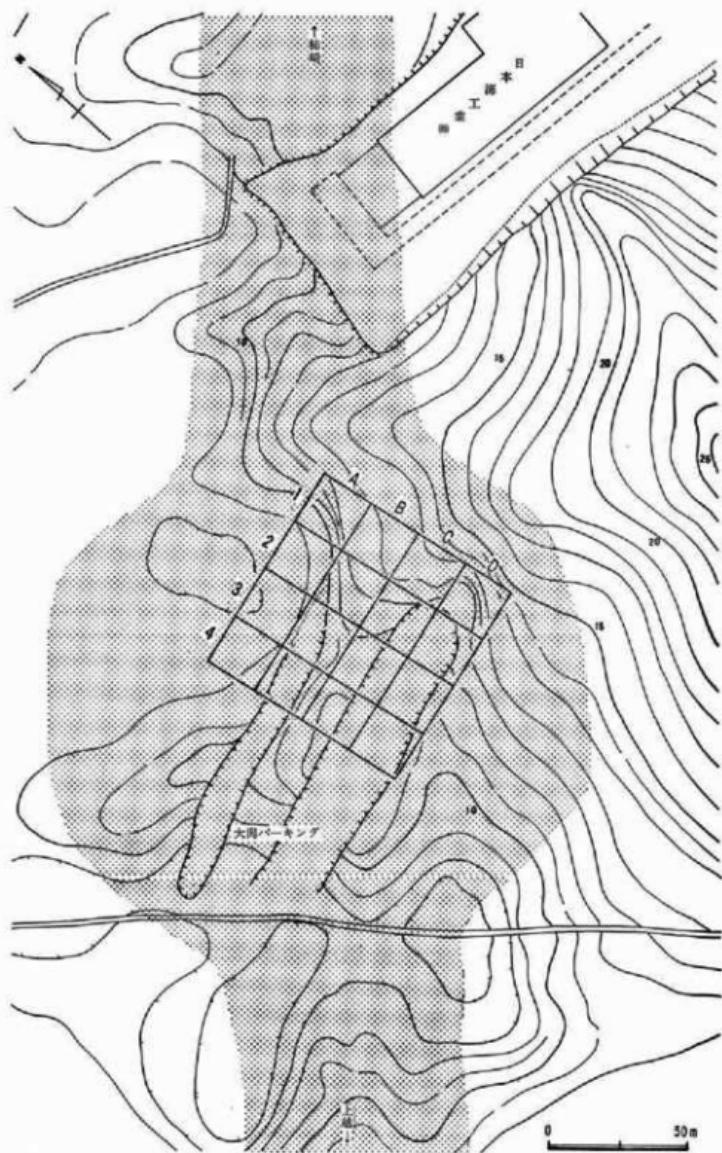
大潟町を中心とする周辺遺跡の調査については、古くから中央の学者によって踏査がなされてきたが、昭和17年に地元在住者である森成鑑造・斎藤秀平らによって上越考古学会が結成されると当地域の考古学的調査・研究が一層盛んになった。研究活動の成果は昭和5年に刊行された『新潟県史跡名勝天然記念物調査報告』第1輯に掲載されている。また、これを土台として昭和12年斎藤秀平氏らによって『新潟県史跡名勝天然記念物調査報告』第7輯が刊行され、県内の遺跡の分布状態が集大成され、本地域の遺跡について、具体的に遺跡・遺物の状況が報

じられている。昭和33年には室岡博・三井田忠等によって柏崎町の鍋屋町遺跡（縄文前期）が調査され、新しい研究調査がスタートした。室岡博は本地域を含む頸城地方の遺跡分布調査を続け、昭和47年に『頸城地方の海と海底・海浜遺跡』を刊行し、砂丘及び海浜遺跡の重要性とその意義を指摘している。

第1図は本遺跡をとりまく周辺市町村に分布する縄文～中世までの遺跡を示したものである。この地域における遺跡の立地を通観すると、大略4種に分けることができる。1～17は砂丘背後の低地・潟湖群に近接する砂丘上及び沖積地に立地する遺跡群である。縄文中期・後期を主体とし、最も古いものは前期末の鍋屋町式期である（第1図1・10の各遺跡）。第3図の石劍は吉崎地内、クリス型石劍は巻地内、玉・狹状耳飾等は屋敷割地内から出土したものといわれている（後藤 1930）。これらの遺物や銅鏡を出土した鶴ノ池周辺については、今後検討を要す地域であろう。18～21は海岸砂丘上に立地する遺跡で、土師器・須恵器を主体とする古墳ないしは平安期のものと考えられる。遺跡の立地は現在の浜集落の立地に極めて近似している。23・25・26は沖積地内の微高地に立地する遺跡で、その時代は平安～中世と推定されている。立地や周辺の地名からも広大な低湿地の存在が裏付けられる。22・27～39は東方からのびる山地や丘陵の先端部に位置する遺跡で、縄文時代中期および中世の城館跡等である。



第3図 大潟町周辺の遺物（後藤 1930より）



第4図 グリップ設定図

### III 発掘調査

#### 1. グリッドの設定 (第4図・第5図)

54年に実施した試掘確認調査の結果と今回の調査で実施したトレーナー法による結果にもとづいてグリッドを設定した。グリッドの基線は N80°E とし、東西80m、南北80mの範囲に20m×20mを大グリッドとした。大グリッド内は第4図のように4m×4mを1区画とした。大グリッドには北から南へA・B・C、東から西へ1・2・3とし、アルファベットと数字の組み合せをもって大グリッドの名称とした。また、小グリッドの名称は大グリッドの名称と小グリッドの番号を組み合せ、たとえばA 1-20、B 2-10などと呼称することにした。

#### 2. 土層と遺構・遺物 (第6・7・9図)

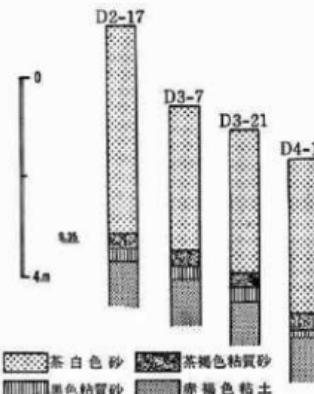
本遺跡の土層堆積は基本的に第6図のように傾斜面における土層堆積をしている。基本層序は上から茶白色砂(新期砂丘砂)、茶褐色粘質砂、黒色粘質砂、赤褐色粘土、黄褐色砂(古期砂丘砂)となっている。茶白色砂は地表面下15~20m埋植しているのみで、無遺物層である。第2層・第3層の茶褐色粘質砂と黒色粘質砂は本遺跡の遺物包含層である。各々20cm内外の厚さを有し、第2層の茶褐色粘質砂は西側及び東側へ行くに従って薄い堆積となっている。第4層の赤褐色粘土は当時の基盤面と考えられるもので第9図が第4層上面と遺構の関係を示したものである。

また、北側の崖面では第2層・第3層の堆積は全くなく表土から確認面まで茶白色砂で遺物は全く出土しない。

遺構は茶褐色粘質砂上面と黒色粘質砂上面に確認される二者がある。前者はピット2~4、1号溝、掘り込み状遺構、火葬骨埋納穴のみで、他は全て後者に属している。遺構は相対的に西側の2号溝

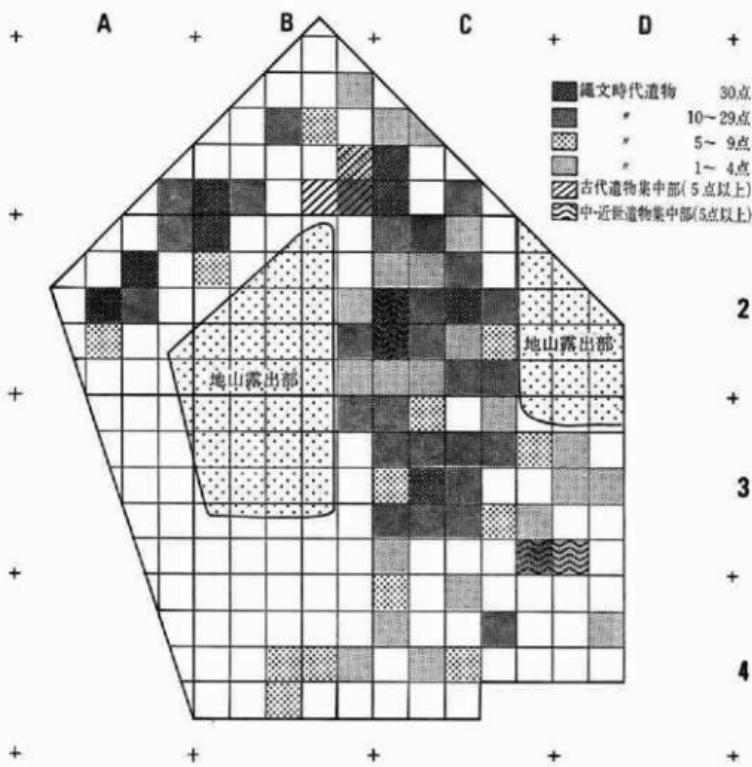
21	18	11	6	1
22	17	12	7	2
23	18	13	8	3
24	19	14	9	4
25	20	15	10	5

第5図 小グリッド名称図



第6図 土層柱状図

でなくなり、B・Cの1・2の標高の高い緩斜面に多い。なお、B2の南側は採砂によって削られているため明確ではない。遺物の散布は赤褐色粘土が露出していた所と北側の崖の部分を除いて全面的に散布している(第7図)。これを時代別に見てみると縄文期のものが全面的に散布し、特に標高の高い地点からC3・4の緩斜面にかけて量的にも多い。これに反し、縄文期以外のものはある程度グルーピングされ、古代のものはB1-24・25に、中世～近世のものはC2-11・16、C3-25、D3-21となる。遺物は茶褐色粘質砂および黒色粘質砂から出土するが、量的には前者が圧倒的に多く、3ラインを境にして4ラインの黒色粘質砂からは全く出土しなくなる。土器の出土状態はまとまってはおらず、個々の破片が単発的に出土し、時代差・時期差があるにもかかわらず同一層から混在して出土している。縄文土器の出土したピットは7・11・22のみで、全体的に遺構と遺物の相関関係は不明であると言わざるを得ない。



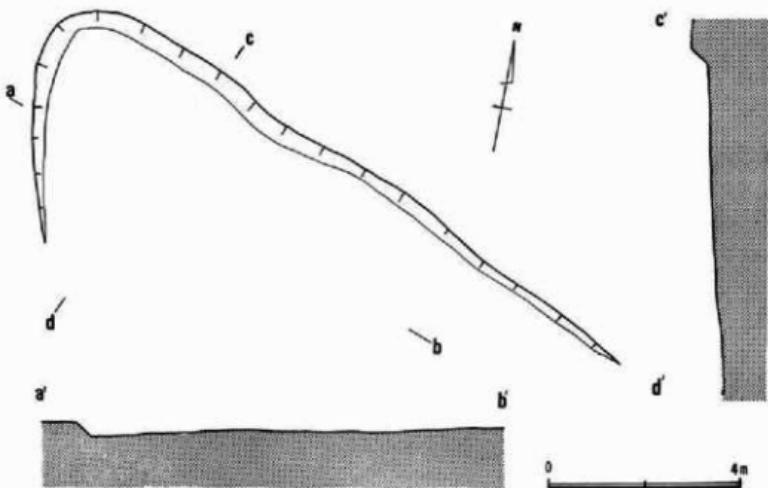
第7図 遺物の分布密度

## IV 遺構

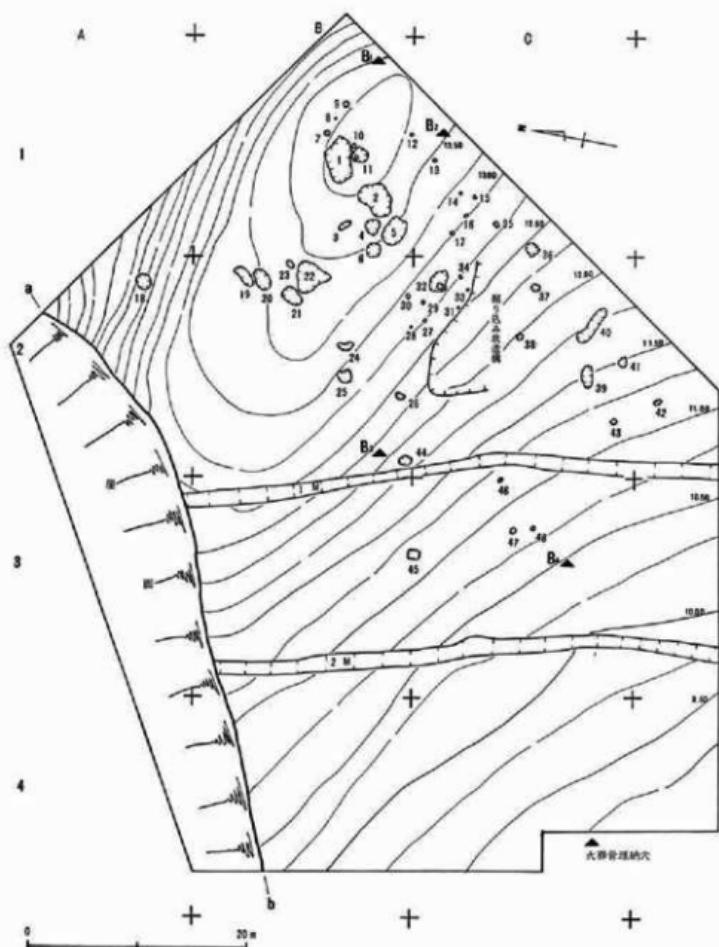
発掘調査区域内で検出された遺構は掘り込み状遺構(1), ピット(48), 溝状遺構(2), 火葬骨埋納穴(4)である。火葬骨埋納穴を除いた遺構の性格等については、発掘面積が狹少なため、これらの遺構が存在していることの事実を除いて明確に把握することはできなかった。なお、B2の西側からB3にかけては採砂によって赤褐色粘土が露呈していたが、かっては遺構が存在していた可能性が多分にあることを最初にことわっておきたい。

### 1. 掘り込み状遺構 (第8図)

C2の北側の茶褐色粘質砂上面で検出され、茶白色砂から掘り込まれたものと思われる。全体の形状は明確ではないが、北側で一辺13.5m, 西側で4.8mを測る。壁高は北側で約0.35mを測り、東側へ行くに従って高さは減少してゆく。西壁も途中で途切れ、南側へ行くに従って高さは減少してゆく。底面は北から南へ緩く傾斜している。底面は全体的によく踏みかためられているが、南側は軟弱である。内部の充満土は下面にうすく赤褐色粘土ブロックを含む黒色粘質砂が、その上面に茶白色砂が埋積していたが遺物は全く検出されなかつた。周辺および内部において柱穴や焼土は確認されず住居跡とは言いがたい。



第8図 掘り込み状遺構

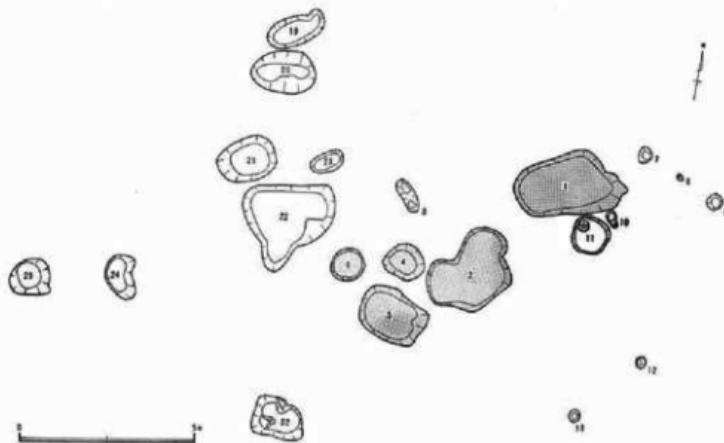


第9図 造構全測図

## 2. ピット (第9・10図、図版第2・3図)

ピットは総計48個を数え、その計測値は表1のとおりである。茶褐色粘質砂上面と黒色粘質砂上面で確認されるものとがある。ピット1～6は茶褐色粘質砂上面で確認され、黄白色砂から掘り込まれたものと思われる。1～6のピットは本遺跡の最高標高地点付近の高まりに集中し、その形態は1・2のように不整形を呈しているもの、3・5のように橢円形を呈するもの、6のように円形を呈するものがある。規模は不整形のものが橢円形のものよりも大きいが、深さについては大差がない。ピット内の充満土は上面から底面まで茶白色砂が詰まっており、短期間の間に急速に埋められたものと思われる。これらのピット内部からは遺物といわれるものは1点も検出されていない。

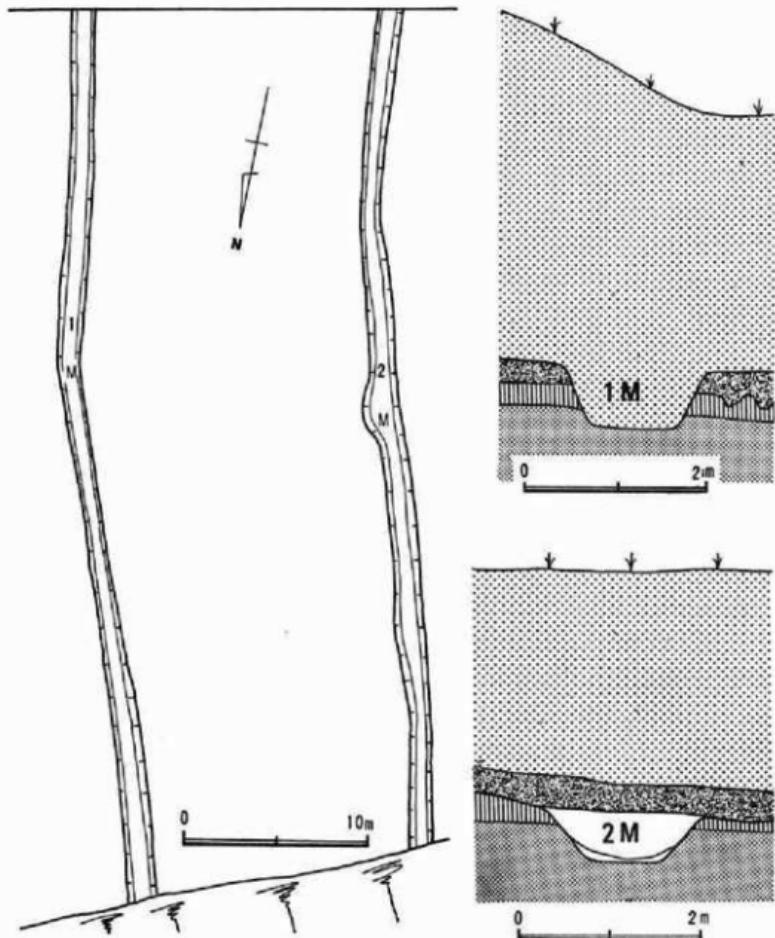
7～48のピットは黒色粘質砂上面で確認され、本遺跡の最高標高地点付近から南西斜面にかけて集中して分布し、西側へ行くに従ってその分布密度は散漫となる。北から北西部および北東部については傾斜が急なためか著しくピットの数は減少し、ピット18が1個斜面上にあるのみである。おそらく、これらのピットは調査対象地外の南側の緩斜面にも分布しているものと思われる。形態は橢円形を呈するものが主で、その規模から2種に分けられる。橢円形を呈し、その規模が大きいものはB 2の北東部とC 3の南側に多いに対しC 2の北東部・C 1の北西部には直径0.3～0.5m、深さ0.1～0.2mの小形ピットが集中している。ピットの内部充満土は暗褐色粘質砂のものが主で、ピット22のように暗褐色砂質粘土に黄褐色砂(古砂丘)のブロック



第10図 ピット

を含んでいるものもある。遺物が出土したピットは7・11・22のみで、他のピットからは1点も出土していない。遺物は縄文時代の単発的破片でまとまるものではなく、それぞれ個体が違うものである。

これら48個のピットの方向性や位置関係を考えてみると相互関係は全くなく、建物跡の柱穴とは考えられない。また、掘り込み状遺構との関連性も定かではない。



第11図 溝状遺構

### 3. 溝 状 遺 構 (第9・11図, 図版第2図)

2本検出されたが2本とも北側は崖面で途切れている。南側はさらに調査地域外の南側へ続いて行くものである。1号溝(1M)と2号溝(2M)とでは溝の埋土が異なっている。

1号溝は赤褐色砂質粘土上面で確認され、茶白色砂から掘り込まれたものであろう。ほぼ北から南に向って掘り込まれているが、中央部よりやや南に寄ったところで西側へ緩くカーブしている。幅は1.4m～1.6mを測り、深さは確認面から0.5m～0.6mを測る。断面は緩やかな「U」字形を呈し、底面はほぼ平坦である。溝の底面のレベルは北側が高く、南側が低くなっている。その差は1.9mを測り、比較的急傾斜である。内部充溝土は黄白色砂のみで、遺物は全く検出されていない。内部充溝上の状態から水の流れるような溝とは性格を異にするものであろう。

2号溝は黒色粘質砂上面で確認されたもので、1号溝とほぼ同じ方向に掘り込まれているが南端に近い所で西側に緩くカーブしている。幅は1.4m～1.5mを測り、深さは確認面から0.5m～0.6mを測る。断面は1号溝よりも緩やかな「U」字形を呈し、底面は平坦である。溝の底面のレベルは北側が高く、南側が低い。その差は1.5mを測り、1号溝よりも緩かである。内部充溝土は2層に識別され、溝底面近くには炭化物を含む暗褐色粘質砂が、その上面には暗褐色粘質砂がレンズ状に埋積している。溝内部からは1点の遺物も検出されなかった。この溝の周辺部から中世頃の遺物が出土しているが、その関係は明らかではない。

### 4. 火葬骨埋納穴 (第12図, 図版第3図)

いずれも赤褐色砂質粘土上面で確認されたものである。底面が赤褐色粘質砂中にあることから本遺構は黄白色砂から掘り込まれたものと思われる。これらの分布のしかたは散漫的で、それぞれが単独にあって、周辺からはこれに伴うような遺構や遺物は検出されていない。

形態はいずれも円形ないしは橢円形を呈し、その規模は0.3m～0.4

m内外を測る。深いもので掘り込み角度は70度ないしは90度、深さ

は0.2mを測る。浅いものは0.1mに達しないものもある。底面は平坦なものと緩やかに中央部が凹むものとがある。火葬骨の埋納状態

は埋納穴内部に充満するように雑然とまとめられ、炭化物が若干火葬骨に混在していた。なお、埋納容器として曲物や布袋が用いられたものと推定されるが、その断片すら検出されなかった。

この種の火葬骨埋納穴について県内では西蒲原郡黒崎町で類例があり、戦国時代末期から江戸時代初期の墳墓と考えられている(新潟県教育委員会 1973)。本遺跡のものも規模・形態などが近似しているので、上記の墳墓と同一時期のものと推定される。



第12図 火葬骨埋納穴(B4)

## V 出土遺物

本遺跡では今回の発掘調査によって縄文時代・歴史時代の遺物が出土した。縄文時代の遺物としては土器片約1,400片（前期～後期）、石器類（磨製石斧・局部磨製石斧・打製石斧・石皿・磨石・敲石・凹石・その他）、垂飾品が出土した。歴史時代の遺物は土器・陶磁器片を時期別に大別すると、古代約40片、中世約60片、近世約40片が出土したほか、少量ではあるが金属器・土鍤・錢貨・鉄滓も出土した。

### 1. 縄文土器

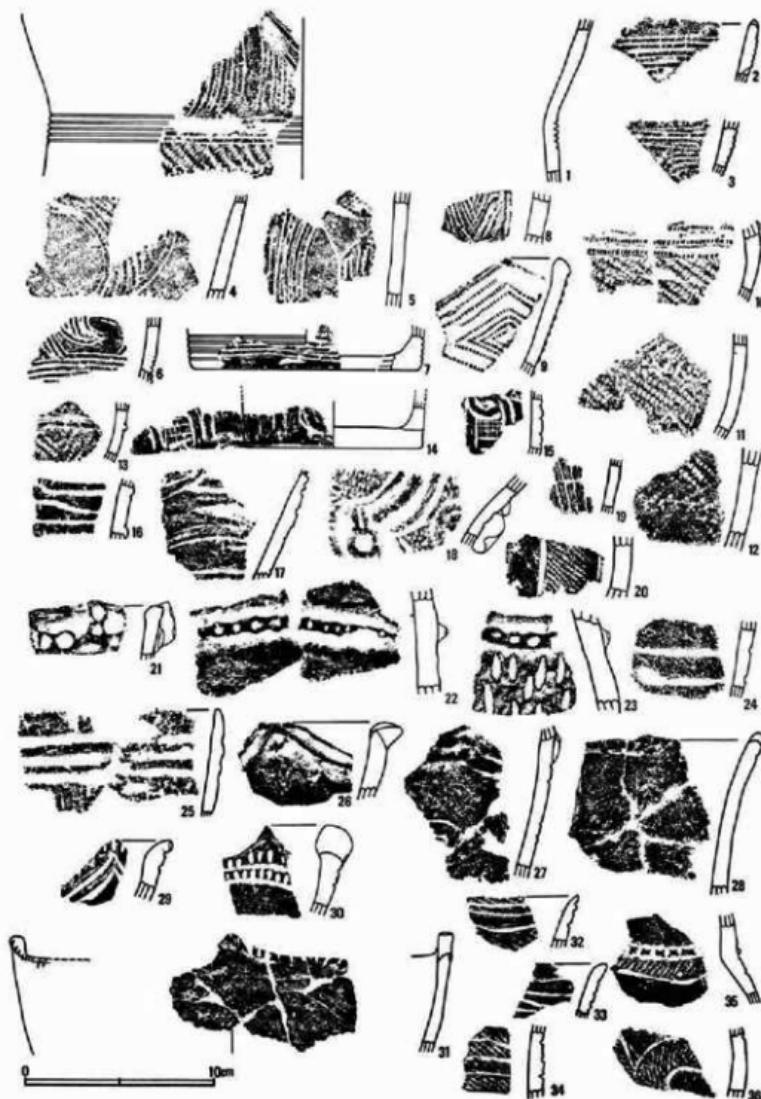
発掘によって出土した土器の大半を縄文土器がしめる。ほとんどが摩滅の激しい破片であり、完形品はなかった。時期としては前期後葉から晩期中葉にわたり、時期判別が可能な土器片中では後期後半から晩期中葉のものが多い。以下、時期別に記述し、次に時期判別の困難な縄文充填・無文の土器片を中心に口縁部・胴部・底部・台付土器に分けて記す。

#### 前期後葉（第13図1～12、図版第6図1～11）

1～7はこの時期の特徴である細い半截竹管状施文具により数条の平行沈線で直・弧文を施しており、柿崎町鍋屋町遺跡第Ⅱ群第1類土器（寺村光晴 1960）に類似し、関東地方の諸畿C式に対比されている。胴部には縄文を施すもの（1）と平行沈線による文様を施すもの（7）がある。8は数条の並行沈線を綾杉状に引き、沈線わきにはまくれ現象がみられる。まくれ現象とは沈線の両側縁に削りとられた素地土の一部が盛りあがるものである（宮城県教育委員会 1978）。9・10は紐状粘土帯を数条並行に張りつけ、その上に連続爪形文を施し結節浮線文としている。鍋屋町遺跡において鍋屋町Ⅱ式に分類されているものであるが、これは鍋屋町Ⅰ式と近年分類しなおされている（山口明 1980）。9は鍋屋町遺跡第Ⅲ群第2類と同様に波状口縁を呈し、その先端に小突起を有する。11・12は羽状縄文を施し、11は縄文原体の施文方向を縱・横にかえて羽状とし、12はR L・L R 2種類の結果によっている。前期後葉のものであろう。土器表面の色調としては1～6・11は茶色、7～10は濃茶色、12は淡茶色である。1・3・5・8・11には炭化物の附着が認められる。すべての胎土中には白色粒を含む。

#### 中期（第13図13～20、図版第6図12～19）

13は縄文原体の施文方向を縱・横にかえて羽状縄文とし、細い半截竹管状施文具によって半隆起線を引いている。14・15は北陸地方を中心分布する新崎・上山田式であり、半隆起線でB字状に区画し、格子目状に沈線を引いている。16は横位に半隆起線を引いている。17は棒状施文具による沈線と削り出しで文様を施している口縁部破片である。18は縄文を施した後、3条の線で文様を施文しており、線は主線を隆線、両わき半隆起線の3条であり、玉状の張りつ



第13図 出土遺物（縄文土器）

けを施している。13～18は中期前半に属する土器である。19は縦状施文具で縦位に沈線を引き、沈線わきにまくれ現象がみられる。20は縦位に磨り消し縦文を施している。19・20は中期後半に属する土器である。土器表面の色調としては13～15・18・19は淡赤黄色、16・20は淡茶色、17は茶色である。13には炭化物の附着が認められる。13～15・17～20は胎土中に白色粒を含む。

#### 中期末～後期前半 (第13図21～28・国版第6図20・21、国版第7図1～6)

21～23は口辺部に粘土帯を張りつけ、その上を連続して楕円形に押圧している。23は胴部に滴形の刺突を充填しており、壺形を呈する三十番場式土器であろう。24・25は横位に断面弧状の幅広沈線を引いている。25は2条の半隆起線を施し、それに沿って沈線を引いており、胴部には縦状施文具で縦位に沈線を施文している。26は波状口縁に沿って口唇に粘土帯を張りつけ肥厚な口唇をしている。27は小波状口縁を呈し、28は口唇部に小突起を有する。ともに口辺に沈線を引いている。27・28は関東地方の堀之内1式併行のものであろう。土器表面の色調としては21は茶色、22・23・25は淡黄色、24・28は淡茶色、26・27は濃茶色である。21～23・26には炭化物の附着が認められる。21・23・27は胎土中に白色粒を含む。

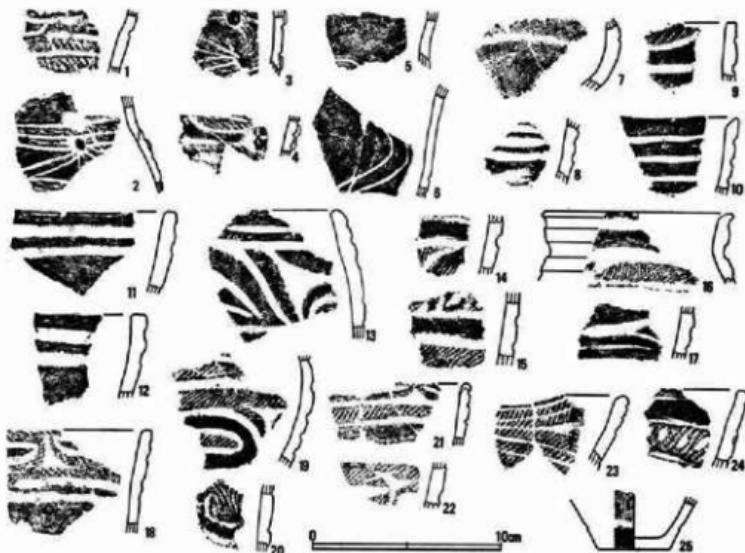
#### 後期後半 (第13図29～36・第14図1～12、国版第7図7～24・国版第8図1・2)

第13図29～31の口縁は緩く開き、波状をなし、30・31は口唇部に小突起を有する。それぞれ口辺に連続する楕円形押圧(29・30)、刻み(31)を施文する。32～34は縦文を施した後、横位に数条の沈線を引き、部分的に縦文を磨り消している。35・36は接合部分はないが、同一個体であり、35は頸部、36は胴部破片である。頸部の半隆起線上を連続して楕円形に押圧し、胴部は沈線で帯状に区画し、磨り消し縦文としている壺形の土器である。29～36は関東地方の加賀利B式併行のものであろう。第14図1～4は張りつけによる瘤文のある土器である。1は瘤が剥落しているが、瘤と並行沈線で文様を構成している。2～4は並行に沈線を引き、その間を微隆帯とし、その上に縦文を施している。文様構成は微隆帯によって横位に区画し、その中をさらに斜行、弧状に区画している。微隆帯の集合点に瘤を張りつけている。類似のものは県内各地の遺跡から出土しており、東北地方の新地式と関連の深い土器である。6は無文地に2条の沈線で縦位に曲線を引き、口縁方向へ聞く土器である。5も同様のものであろう。妙高村森生遺跡<後期新>(中川成夫・加藤晋平・岡本勇 1966・1967)に類似例があり、「東海・甲信地方に主として分布する土器で、瘤文をもたないことを大きな特色としている」とされている。7は内側する口縁部破片である。口辺に縦文を施し、その下に横位に沈線を引いている。8～10は幅広沈線を数条横位に引いている。11・12は横位に半隆起線を引き、それに沿って両わきに沈線を引いている。土器表面の色調としては29・7・12は淡茶色、30・31・34・3は淡黄色、32・4・6は淡赤黄色、33・5・8・9・11は濃茶色、35・36は黒褐色、1・10は茶色である。29・30・1・2・10には炭化物の附着が認められる。30・35・7は胎土中に白色粒を含み、1～4は透明な黒色粒を含む。7の胎土は黒色である。

晩期前葉～中葉 (第14図13～22、図版第8図3～12)

13～17は幅広沈線による三叉文・弧線文・入組文で文様を構成する一群の土器である。13～15は沈線で文様を施した後、1段多条縦文を施文している。前記の葦生遺跡<晩期古>に類似例があり、大洞B式的なものとされている。16は1段多条縦文を施文した後に幅広沈線で文様を施しており、臺形の土器であろう。17は無文地に沈線で文様を施している。これらは晩期前葉に属する土器であろう。18～20は1段多条縦文を施した後に幅広の沈線で眼鏡状文を施している。21・22は縦文を施した後に、21は工字文を、22は縫の手文を施している。18～22は糸魚川市細池遺跡第Ⅲ地点第1・2号住居跡出土の土器に類似するものがあり、晩期中葉の大洞C<sub>1</sub>～A式併行期のものであろう。土器表面の色調としては13・15・20・21は淡茶色、14・17～19は濃茶色、16は茶色、22は黒褐色である。13・16・19には炭化物の附着が認められる。17は胎土中に白色粒と極少量の金雲母を含む。

このほかにも晩期と思われるものがある (第14図23～25、図版第13～15)。23は波状の口縁をなし、横位に数条沈線を引いた後に縦文を施している。24は縦文を充填した後に横位の沈線と梢円形刺突文を施している。25は縦文下の浅い沈線によって胴部と底辺部を区画している。土器表面の色調としては23は淡茶色、24・25は濃茶色である。



第14図 出土遺物 (縦文土器)

#### 口 繩 部 (第15図1~18, 図版第8図16~23・図版第9図1~10)

1~12は繩文, 13~18は無文の口縁部破片である。1・2は口唇部を横なでして丸く整形している。3~9は口唇を外側に薄く折り返し、8・9はさらに口唇部を横なでして平らに整形している。10~12は口唇部を横なでにより平らに整形している。13は口唇部を横なでにより丸く整形し、14・15は平らに整形している。16・17は口唇を外側に薄く折り返している。17・18は口唇部を横なでして平らに整形している。土器表面の色調としては、1淡赤褐色, 2・8・13淡黄色, 3黒褐色, 4・6淡赤黄色, 5・7・11・14・15・18薄茶色, 9・10・17茶色, 12・16濃茶色である。9・11・18には炭化物の附着が認められる。

#### 肩 部 (第15図19~36, 図版第9図11)

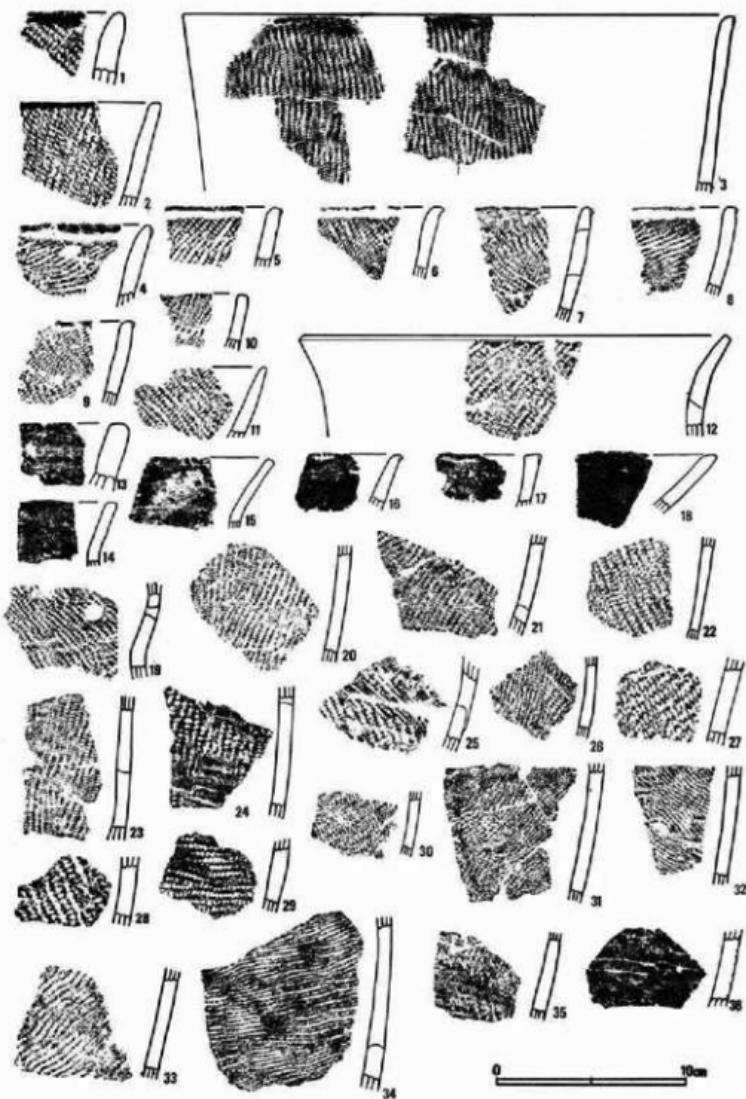
出土した土器片の多くは縄文を充填した胴部破片である。中でも単節縄文のしめる割合は大きく、RLあるいはLRどちらか一方への極端な偏りはみられなかった。19~26はRLを充填したものである。今回の出土土器中で補修孔が穿たれていたのは19のみである。23は0段多条RLを充填している。25は接合部外面を下へ引きのばし文様化している。27~31はLRを充填したものである。30は0段多条RL, 31は部分的に $L\overset{R}{L}$ の附加条縄文を施文している。32・33は無縄縄文を充填し、32はR, 33はLである。34・35は撚糸文で、34は0段L, 35は1段Rを巻いたものを施文している。無文土器としてはヘラによるなでのなされた土器片が多く出土した。36は平行沈線を引いた後になでてつぶしている。土器表面の色調としては、19・20・23・26・27・30・33淡茶色, 21・32淡赤黄色, 22・29茶色, 24・25・31・34・35濃茶色, 28・36淡黄色である。19・24・33・34には炭化物の附着が認められる。

#### 底 部 (第16図1~12, 図版第9図12)

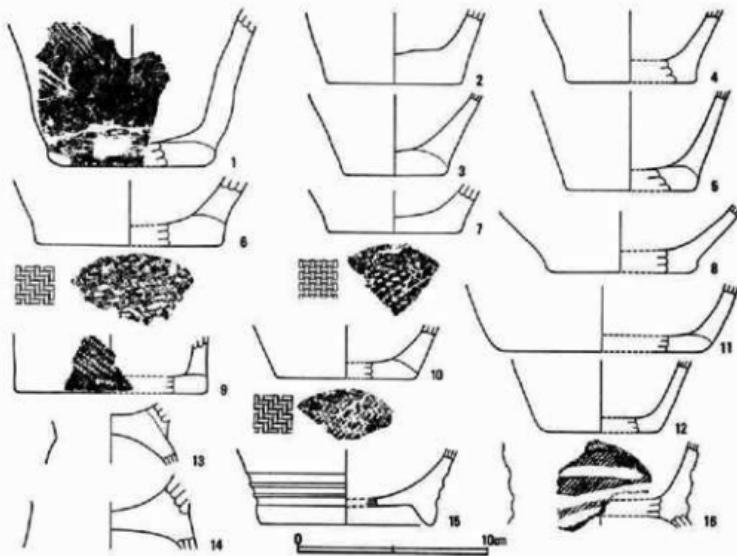
1~8の底辺部は幅広の横なでによって縫り、上方へ開いている。1は胴部に櫛状施文具による沈線を引いている。8は上方へ急激に開いている。9は底部際まで縄文を施し、上方へ直立した筒状を呈している。11・12は底辺部と底部の際を横なでにより丸みをもたせて整形している。6・7・10の底には網代状の圧痕が施文しており、6・7には編み目につき間があり、10はほとんどない。1~8は中・後期、9~12は後・晚期のものであろう。土器表面の色調としては、1・4淡赤黄色, 2・3淡黄色, 5・6淡茶色, 7黒色, 8茶色, 9濃茶色, 10~12黒褐色である。1・4は胎土中に白色粒を含む。5は多量に砂粒を含み、内面上方に炭化物の附着が認められる。

#### 台付土器 (第16図13~16, 図版第9図13~16)

台部及び器部と台部の接合部分である。13・14は台部の端部が剥落しているが、15と同様に浅い台部になるものであろう。表面の磨滅が激しいが、無文と思われる。15は横位の2条の半隆起線に沿って3条の幅広沈線を引いている。ほかと違い器部内面を黒色に研磨している。16は器部・台部ともに欠損しており、0段多条の縄文を施した後に幅広沈線を引いて文様を施し



第15図 出土遺物 (縄文土器)

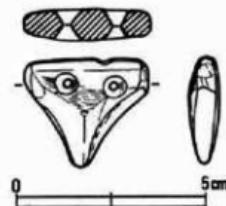


第16図 出土遺物（縄文土器）

ている。晩期に属する土器である。土器表面の色調としては、13淡赤褐色、14・15淡黄色、16淡茶色である。13は器部内面に炭化物の附着が認められ、胎土中に白色粒を含む。

#### 垂飾品（第17図、図版第9図17）

三角形を呈し、横3.3cm、縦2.9cm、厚さ8mmの板状の石製品である。石材は頁岩質で風化している。三角形に面取りをしており、稜線、擦痕が認められる。この形状に近い軫石を利用したものであろう。2個の孔は両面穿孔であり、孔の内面には削底が明瞭に認められる。類似のものが大鴨町屋敷割地内から表採され、報告されている（後藤 1930）。



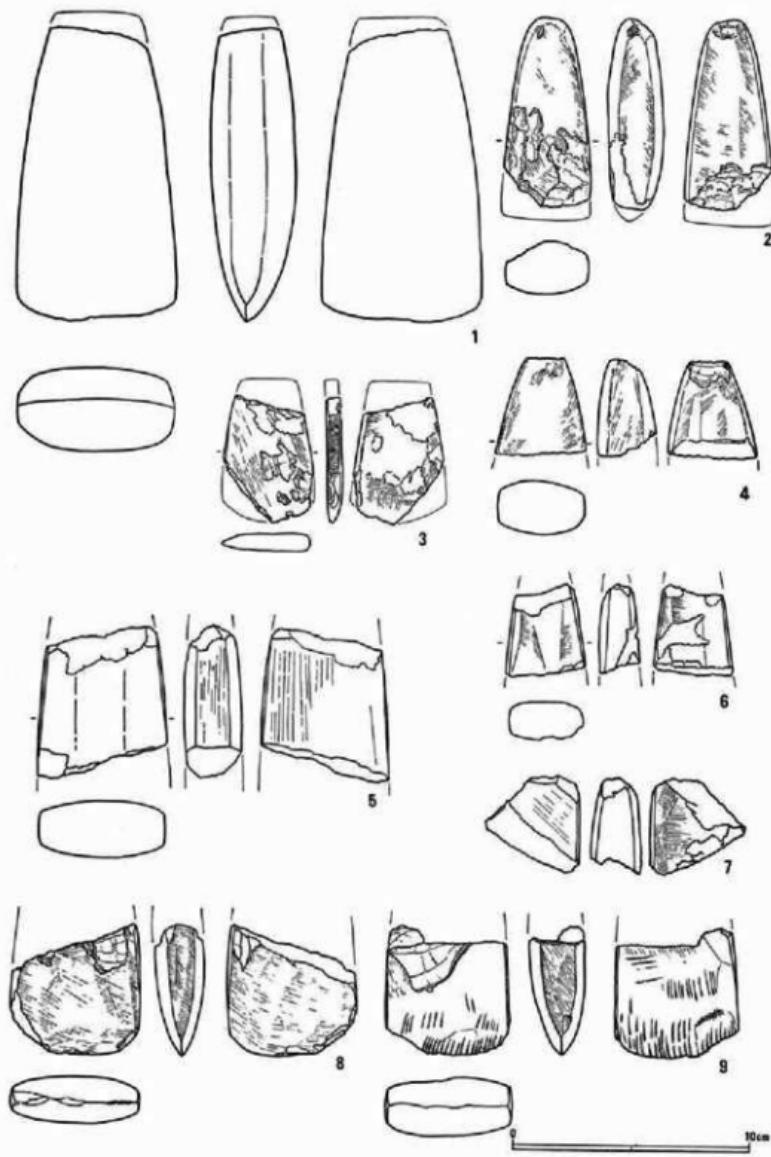
第17図 出土遺物（垂飾品）

## 2. 石 器

本遺跡からは、磨製石斧（9）、局部磨製石斧（2）、打製石斧（5）、石皿（1）、磨石（17）、敲石（1）、凹石（3）、原石（3）、石核（2）、剝片（21）、砥石（1）が出土している。遺物包含層は地表面下2～3mにあるが、讃文時代前期・中期・後期・晚期、平安時代、中世、近世の遺物が混在して出土しているため、砥石を除く石器類は少なくとも讃文時代に属するが、その時期等を限定することはできない。

### 磨製石斧（第18図1～9、図版第10図1～9）

- 1 頭部を欠損している。現長12.2cm、巾6.7cm、厚さ3.4cm、現重量492g。全体に非常によく研磨されているが側縁部の稜線は明瞭ではない。刃部は「丸ノミ」様に彎曲しており、「手斧」として着柄・使用されたことを示している。
- 2 刃部を欠損し、頭部の一部に剝離面がみられる。現長8.0cm、巾3.6cm、厚さ2.2cm、現重量100g。各部に研磨の際生じた条痕がみられ、一部では稜線を生じている。多くの条痕は左に傾斜しており、研磨する際斧の長軸と研磨の方向が一致していなかったことを示している。刃部の欠損した先端部が潰れており、斧として使用されなくなった後「楔」もしくは「敲石」として転用されたことを示している。頭部の剝離面もその際生じたと思われる。
- 3 頭部と刃部の一部を欠損している。現長5.3cm、巾3.8cm、厚さ0.7cm、現重量19g、非常に薄身で片刃であり、「鉋」の刃を思わせる。体部のあちこちが荒れているが研ぎ残しではなく研磨後の剥落であろう。研磨による条痕は細かく、図右側面では長軸に直交し、左側面では平行する。比重の小さい石を素材としている。
- 4 頭部破片である。現長4.1cm、巾3.7cm、厚さ2.4cm、現重量55g。よく研磨されており光沢を持つが、各部に研磨による条痕がみられる。側面の稜線は多くの研ぎ面の集合で一本の線にはなっていない。頭部の割れ口には研磨痕がみられる。図正面から裏面へ抜ける力で折れている。
- 5 脚部破片である。現長6.2cm、巾5.4cm、厚さ2.4cm、現重量147g。よく研磨されているが、研磨による条痕がかかるながらみられる。
- 6 脚部破片である。現長3.6cm、巾3.3cm、厚さ1.7cm、現重量24g。研磨による条痕と稜線がみられる。刃部側は図裏面から正面へ抜ける力で折れている。
- 7 脚部破片である。現長4.0cm、厚さ1.90cm、現重量34g。折れ口は摩耗し、水アカが付着している。廃棄後長期にわたり水に漬っていたものであろう。
- 8 刃部破片である。現長5.5cm、巾5.5cm、厚さ2.0cm、現重量77g。全面に研磨による条痕がみられ、左に傾斜し、長さは1cmに満たない。図正面右から左へ抜ける力で折れている。
- 9 刃部破片である。現長5.4cm、巾5.2cm、厚さ2.1cm、現重量95g。よく使い込まれており、



第18図 出土遺物 (唐製石斧)

刃こぼれ後も使用され摩耗している。使用の結果生じた線条痕は研磨痕と明瞭に区別され、図正面で右に傾斜しており、図正面左側に柄が着けられた斧であることを示している。折れ口は頭部に対して右にねじる方向で力が抜けている。

局部製磨石斧 (第19図1・2、図版第10図10・11)

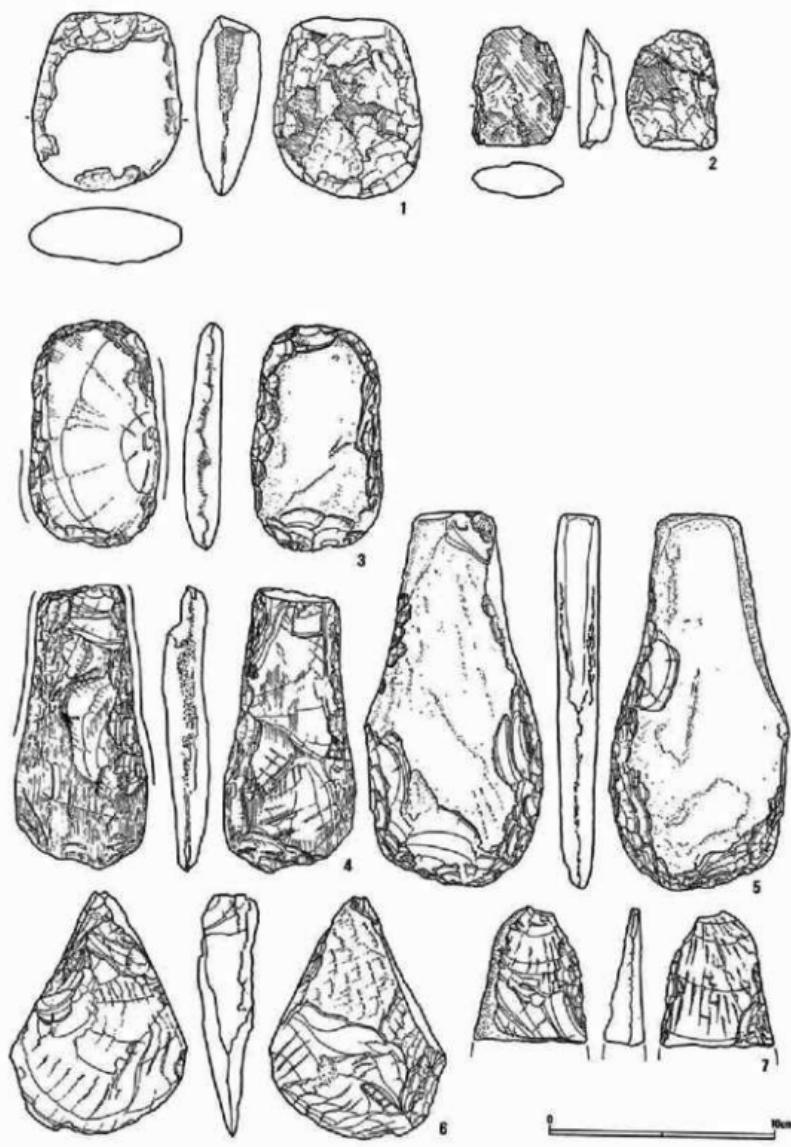
- 1 風化が著しく詳しい観察はできないが一応完形品とする。長さ7.9cm、巾6.5cm、厚さ2.7cm、重さ169g。素材となった砾の旧態を大きく変えることなく研磨し形を整えている。図正面に比して、裏面の研磨されている範囲はごく狭い。
- 2 頭部、刃部を欠損している。現長5.3cm、巾4.0cm、厚1.5cm、現重量43g。素材となった砾の旧態をほとんど変形しない程度の研磨で形を整えており、側面には砾面の名残がみられる。図裏面への研磨はごくわずかである。

打製石斧 (第19図3～7、図版第10図12～16)

- 3 短圓形完形品。長さ10.0cm、巾5.9cm、厚さ1.5cm、重さ137g。横長剝片を素材とし、バブルの高まりを利用して身の反りを得ている。そのため砾面のある方が石器の裏面となり、素材と石器で表裏が逆になっている。両側縁に「つぶれ」がみられる。図上方の剥離面も摩耗しており、上・下とも刃部として使用された可能性がある。
- 4 摻形完形品。長さ12.5cm、巾5.7cm、厚さ1.7cm、重さ160g。頭部は図裏面から正面に抜ける力で一度折れた後、再調整されている。両側縁に「つぶれ」がみられ、右側面觀は直線的であるが、左側面觀はやや反りを持っている。使用による摩耗が著しく、正・裏面とも刃部側約3分の範囲が摩れており、刃先は丸味を帯びている。頭部近くの摩耗は「柄ずれ」の可能性がある。
- 5 摻形完形品。長さ16.7cm、巾7.7cm、厚さ1.9cm、重さ327g。表裏及び側面の一部に自然面を残しており、素材となった扁平な砾を大きく変形することなく作りあげている。身の反りはない。刃先は丸味を帯び、使用により摩耗している。
- 6 摻形完形品。長さ10.6cm、巾7.7cm、厚さ2.2cm、重さ170g。図裏面と右側面の一部に筋理面を残している。図正面はポジティブ、裏面はネガティブな剥離面を残している。
- 7 摻形頭部破片。現長5.9cm、巾5.0cm、厚さ1.8cm、現重量47g。横長剝片を素材としており、図左側面に砾面を残している。側縁部の調整はわずかである。

磨石 (第20図1～3、図版第10図23・24)

- 1 長さ14.3cm、厚さ7.4cm。砾の旧態をよく留めている。正・裏面とも中央部付近がよく磨れており光沢を持っている。右側面に敲打痕を持っている。
- 2 長さ13.1cm、厚さ6.0cm、図正面中央付近はよく磨れている。図裏面には凹石を思わせる小さい凹がある。
- 3 長さ13.0cm、厚さ6.8cm。砾の旧態をよく留めている。磨れ方に差は認められない。



第 19 図 出 土 遺 物 (局部磨製石斧・打製石斧)

**四 石** (第20図4～6、図版第10図20～22)

- 4 長さ9.6cm、厚さ4.8cm。正・裏両面に凹があり、凹の周囲は磨れている。図正面の凹は輪郭がはっきりし凹も深いが、裏面の凹は形がしっかりしていない。一部が熱を受けている。
- 5 一部を欠損している。現長10.6cm、厚さ5.0cm、凹は図正面1ヶ所。裏面にも凹らしきものがある。側面には敲打痕がみられ、一部はえぐれている。全体が熱を受けている。
- 6 一部を欠損している。現長9.1cm、厚さ5.9cm、凹は片面のみである。ほぼ正方形をしており、両側面はかすかに稜を持つ。

**石 直** (第20図7、図版第10図25)

- 7 一部を欠損している。素材となった円礫の旧態をほとんど変形していない。全体に比して皿状の凹部は狭い。皿状部中央にさらに「筋砥」様の浅い溝がいよいよある。熱をうけている。

**石 鏨** (第21図1～3、図版第10図17～19)

- 1 長さ9.2cm、巾6.7cm、重さ168g。扁平な円礫の両端に、表裏とも各1回の加撃によりえぐり部を作り出している。横位置で使用するように重心より上にえぐり部がある。
- 2 長さ9.7cm、巾5.9cm、重さ188g。扁平な円礫の両端に、表裏とも各1回の加撃によりえぐり部を作り出している。横位置で使用するように重心より上にえぐり部がある。
- 3 長さ4.5cm、巾4.3cm、重さ31g。小扁平礫の両端に数回加撃しえぐり部を作り出している。横位置で使用するように重心より上にえぐり部がある。1、2に比して小型である。

**研磨面を有する石** (第21図4)

- 4 下半部を欠いている。断面はほぼ正三角を呈している。図裏面を除く2面は非常によく研磨されており光沢を帯びている。裏面には調整が加えられ、平らに仕上げようとする意図が窺えるが研磨されておらず、どのような意味を持った石器であるか判然としない。

**敲 石** (第21図5)

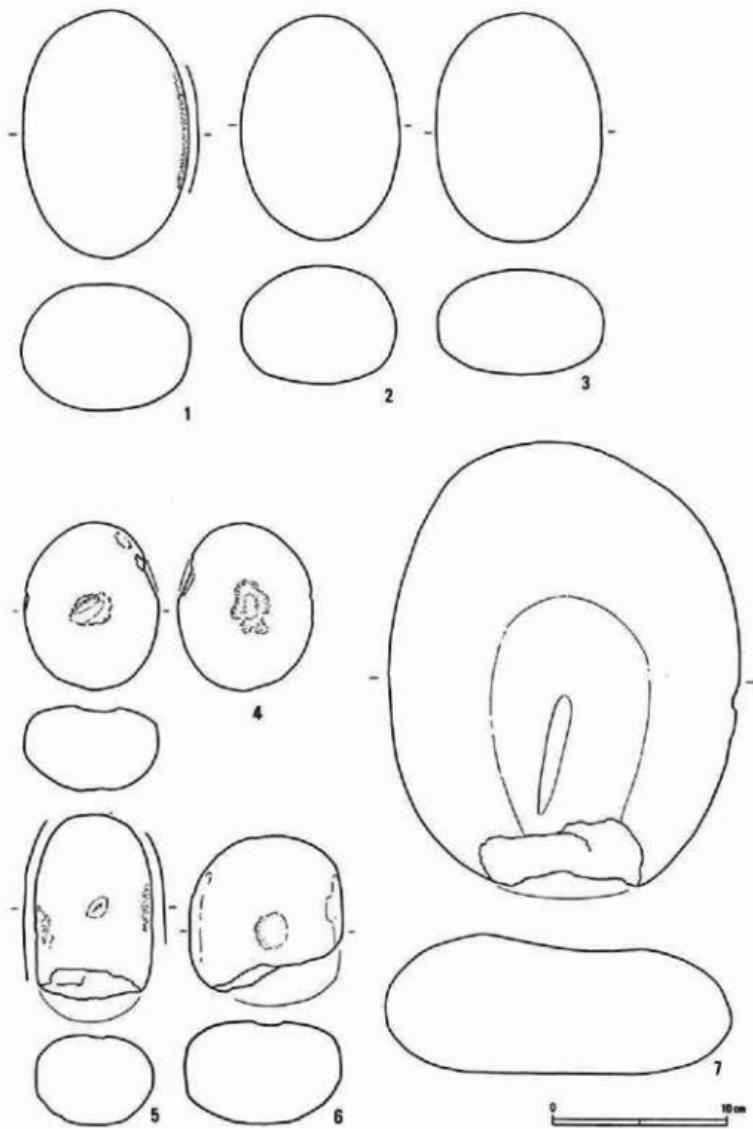
- 5 長さ8.6cm、巾2.4cm、厚さ1.1cm。扁平な礫の両端側面に敲打痕がみられ、図正面右上の面は敲打の後磨れている。一部が熱を受けている。

**石 核** (第21図6・7)

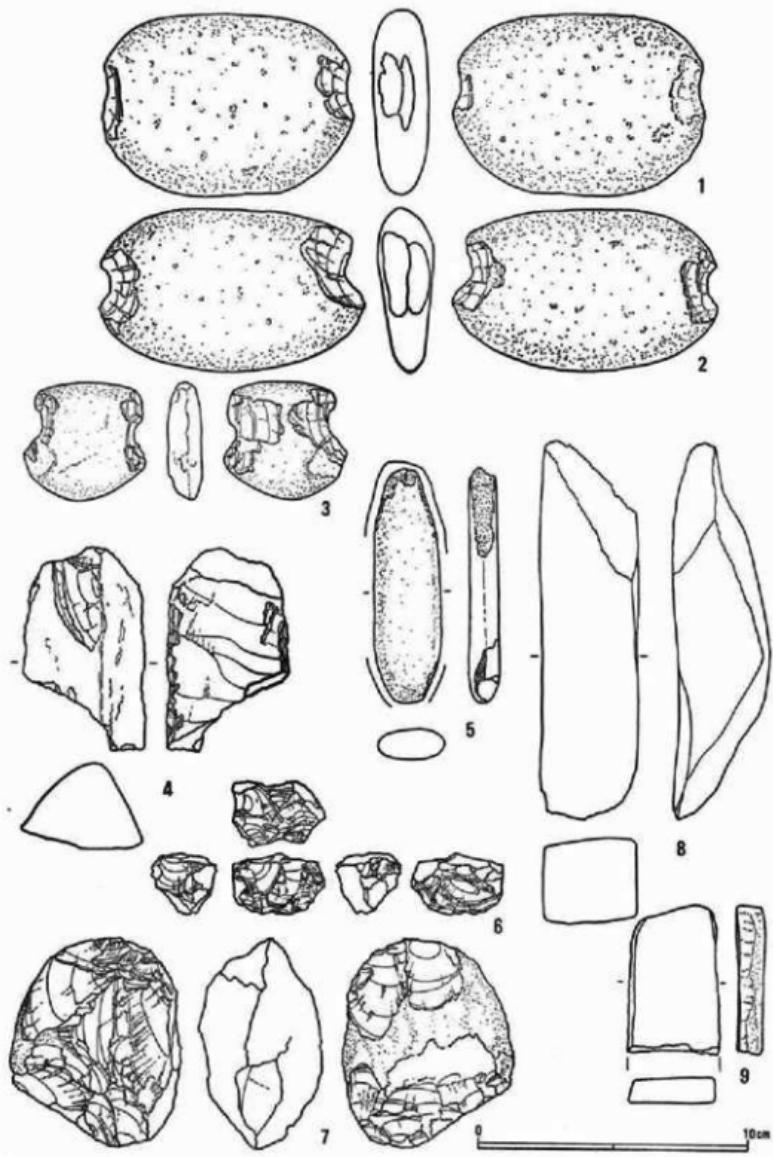
- 6 断面ほぼ正三角形の角柱状を呈している。様々な方向から剝離され、得られた剝片の形状は一定せず、さほど大きくなかったと思われる。
- 7 表・裏両面ともに礫面を残しており、原石の大きさと大差ないことがわかる。使用に耐え得る剝片がとれたか否かはっきりしないが、石核としてあつかった。

**砥 石** (第21図8・9)

- 8 ほぼ四角柱状を呈しているが、裏面には礫面の名残りがある。
- 9 表・裏とも非常によく磨れている。側面には成形した際の荒削りの痕跡がみられる。



第 20 図 出 土 遺 物 (磨石・四石・石皿)



第 21 図 出 土 造 物 (石錐・その他)

### 3. 歴史時代の遺物

縄文時代の土器・石器のほかに、少量の古代・中世・近世の遺物が出土した。これらはいくつかの時代・時期に分けられるが、小破片でまとまつてはいない。

#### 須恵器（第22図1・第23図27、図版第11図）

提瓶（1）と甕（27）がある。提瓶は口頸部破片で体部肩に把手の割離痕をとどめる。内外面ともロクロナデ、胎土精良、焼成堅緻。口頸部内面と外面に自然釉がかかる。6世紀後半～7世紀前半に比定されよう。甕は27をはじめ体部小破片が数点ある。いずれも外面格子叩き、内面同心円文叩きである。焼成時の台かと思われる粘土塊が付着したものがある（図版第11図）。

#### 土師器（第22図2～10、図版第11図）

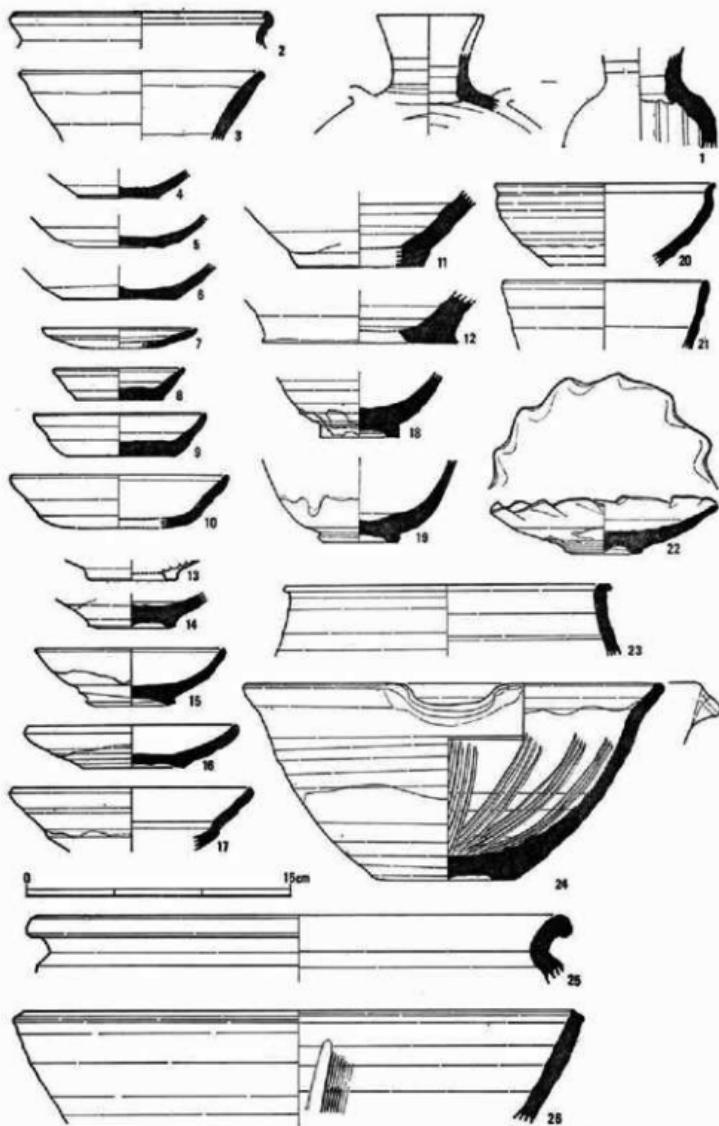
甕、壺、皿などがある。2は長胴の形態をとるロクロ使用の甕口縁部である。平安時代前期の時期に比定される。3は外面に煤が付着しており、甕の口縁部かと推定される。内外面ともヨコナデ。壺（4～6）はいずれも底部回転糸切りであるが、5のみ底部と体部の境にヘラケズリが施される。7～10は皿である。このうち8・9は底部回転糸切りでロクロ成形による。7・10は口縁部から体部はヨコナデで底部は不調整のままである。7と10、8と9はそれぞれ、形態、手法、焼成、胎土等いずれも近似しており、大小のセットをなす中世の皿と考えられる。

#### 中世陶器（第22図11～13・25・26・第23図28～34、図版第12図）

珠洲焼系がほとんどであり、わずかに常滑焼系が含まれる。全体で40点ほどの破片がある。珠洲焼系には摺鉢と甕がある。摺鉢は口縁の形態に3種類ある。26は若干内彎気味にたちあがり、端部は内側につまみあげられ、おろし目は浅く繊細な8本1単位で、全体では「米」状を呈すかと思われる。28は端面が凹み太いおろし目がほどこされる。29は器壁が厚く内傾する面に波状文があげられ、おろし目は太くて粗い。胎土、焼成は26が良好なのに対し、28・29は不良である。甕は底部（11、12）、口縁部（25）、体部破片（30～33）である。底部はとともに静止糸切りで、12には意図的かとも思われる破面がみられる。体部はいずれも外面条線状叩き、内面は丸い凹みが明瞭である。32は面取り風の叩きで、胎土、焼成がとくに良好である。これらはいずれも珠洲窯の製品の特徴を具備しており、その編年（吉岡康鶴 1977、伊藤信太郎他、1970）から13～15世紀の時期に比定される。このほかに常滑焼系の甕破片2点（図版第12図a、b）と条線状叩き目で酸化焰焼成の塑体部上半部破片（34）がある。

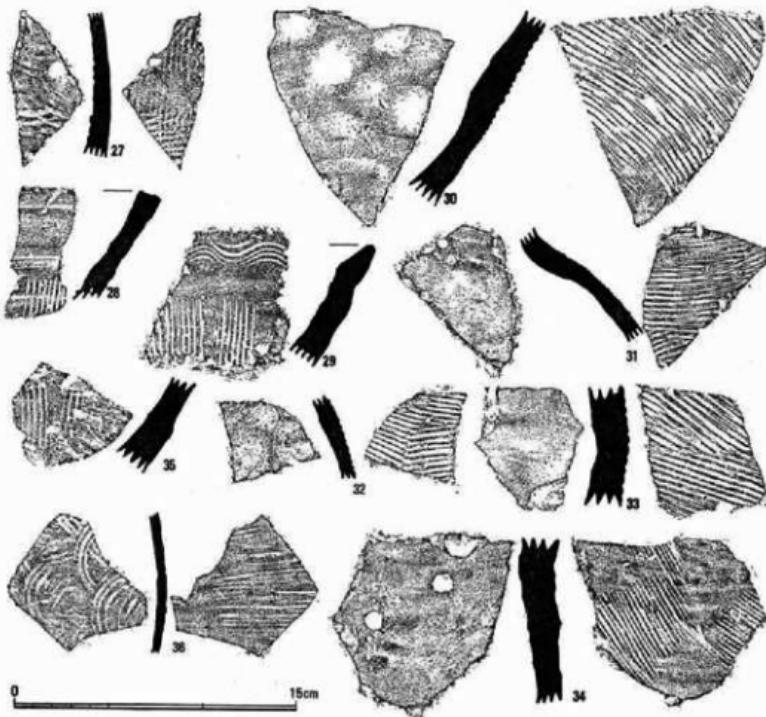
#### 近世陶磁器（第22図15～24・第23図35・36、図版第12～14）

ほとんどが施釉陶器であるが、無釉陶器（35、36、p）と磁器（13、c～e、n）が若干含まれる。器種は壺、皿、摺鉢、甕などである。施釉陶器の壺、皿は内面と外面上半に釉がほどこされ、高台は削り出しである。皿の内面中央には焼成時のトチノの痕跡を残すものが多い。釉はさまざまであるが、緑色系のもの（14、16、18、22、23）、灰釉に近いもの（f～m）、鉄釉と思わ



第 22 図 出 土 遺 物 (土師器・須恵器・中・近世陶磁器)

れるもの(19, 20, s~v), 志野風の色調と貫入をもつもの(15, 17)などさまざまであり、胎土の特色からも産地は一定していないと推定される。24の描鉢は暗黄緑色の釉が口縁部内面から全体部外面にかけて施される特異な例である。おろし目は4本1単位で、全体で17単位ある。まばらなおろし目からすれば、中世陶器に類似するが、施釉されること、削り出し高台であること、胎土が他の近世陶器と共通すること、さらには全体の器形が中世陶器にはみられないことなどを勘案すれば、近世の所産とするのが妥当であろう。なお、20の魁は天目と考えられ、口縁部の形態と低い器形から、中世末に遡る可能性をもつ。磁器は伊万里の染付(図版第14図d・e)のほかに中世の舶載品かとも思われる塊(13, c, n)がある。これらは色調や焼成からみて、舶載品としても良質ではない。以上の陶磁器は伊万里の染付からみて近世後半期まで降下するものを含み、中世陶器に連続する時期まで幅をもつものと推定される。



第23図 出土遺物(中・近世陶器)

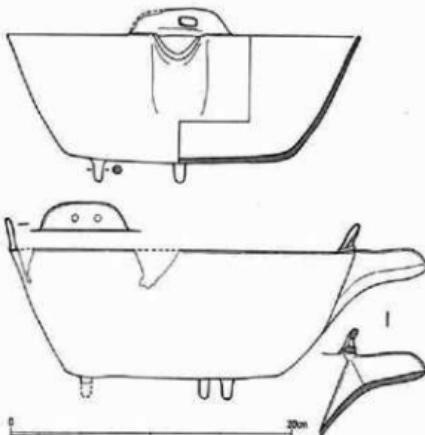
提子 (第24図)

鉄製で、円形の容器部に片口と脚、つるのとり付け部が付されている。容器部は径 25cm、高さ 9cm で容量約 600cc である。つるのとり付け部は片口の上部に方形の一孔、その対側に形状は不明であるが二孔が穿ってある。脚は径 0.6cm、高さ 1.4cm で断面円形を呈し、全体で三本ある。清酒の樽に使用するものと考えられる。

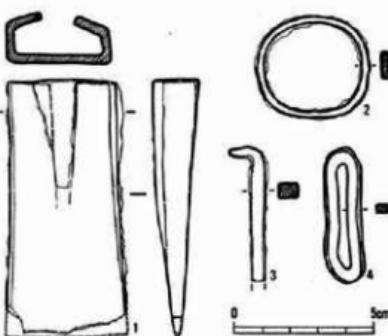
その他の遺物 (第25・26図、図版第14図)

1 は鉄製の手斧である。基部は方形のソケットとなり、刃先は直線の両刃である。刃渡り推定 4.3cm を測る。2 はやや歪んでいるが本来は円形を呈する鉄環である。着柄などに使用するものであろうか。鉄釘は數点出土しているが、いずれも 3 と同じ形態である。断面方形で頭部はカギ状に屈折する。4 は鉄芯に銅と銀を重ねて鍍金したものである。断面方形で環状となる。用途は不明であるが、日常雑器以外の品物に使用されたものであろう。鉄製品以外に鐵滓が 2、3 点検出されている (図版第14図)。分析はしていないが、小鍛冶にともなうものであろう。

このほかに錢貨と土鍤が 1 点ずつ出土している (第26図、図版第14図)。土鍤は長さ 5.2cm、径 3mm ほどの孔をもつ。孔の径は一方が広い。重量は 15g である。錢貨は北宋の皇宋通宝 (1039年鑄造) である。



第24図 出土遺物 (提子)



第25図 出土遺物 (手斧・釘・鉄環)



第26図 出土遺物 (錢貨・土鍤)

## V 総 括

### 1. 新潟県内の砂丘遺跡

新潟県下には日本海沿いに、高田平野・柏崎平野・新潟平野などの海岸平野が発達している。これらの平野は内湾をもたずに直線状の海岸線をなし、いずれも砂丘の発達が見られる。それは、高田平野北部の鴻町砂丘、米山海岸から柏崎平野北西部の荒浜砂丘、角田山麓から瀬波までの新潟砂丘である。それぞれの砂丘の背後には沖積平野があり、小段丘を伴って存在している。新潟砂丘は沖積世に形成された新砂丘のみからなる砂丘で、海岸線に平行にのび、列状をなし、もっとも多い所で10列からなっている。これらの砂丘列は、砂丘表面に形成された腐植層と砂丘層の風化の程度から新砂丘Ⅰ・Ⅱ・Ⅲに区分されている（新潟古砂丘グループ 1974）。鴻町砂丘および荒浜砂丘は洪積世に形成された古砂丘と沖積世に形成された新砂丘が複合する砂丘で、新潟砂丘のように列状は呈していない。古砂丘は共通した特徴から鴻町砂層、番神砂層と命名され、鴻町砂層の黒色腐植土は  $6200 \pm 110$  Y.B.P という数値が得られている（新潟古砂丘グループ 1972）。

新潟砂丘における遺跡のあり方についてはすでに発表されている（岡本 1972、新潟古砂丘グループ 1974）ので、ここでは鴻町砂丘における遺跡のあり方について記述することにする。鴻町砂丘における考古学的記録はⅠ-3 で述べたもの他に、古くは江戸時代まで遡ることができるが、採集した遺物の紹介が主で、砂丘と遺物の関係について着眼されたのは昭和に入ってからであった。後藤守一は「石器又は土器等を発見する諸地点について見るに、其の殆んどすべては表面 1 m 内外の砂に覆われ、其の下に 20 m 内外の黒土、1 m 内外の赤土、同じく 1 m 内外のいく地という順に層をなしているが、其の下は厚い砂層をなしている。」とし、遺跡は砂嘴の上に営まれたものと考えられている（後藤 1930）。さらに後藤は砂丘遺跡を 5 つのタイプに分けている（後藤 1942）。それによると (1) 集落跡が砂丘の進展につれて埋没されて、その一部、被砂の害の未だ及ばざる地域に於て遺物の散布を見る（浜板型式）、(2) 脊砂丘の上に集落の営まれしもの（圓石型式）、(3) 砂丘の活動時代にその一部に集落の営まれしもの（行塚型式）、(4) 浜板型式の遺跡の中、砂層下に没し去ったものが、再度の砂丘活動によつて露呈するに至りもの（浜詰型式）、(5) 砂丘とは直接関係なく砂丘の発達によって生じた洞を生活要素として存地せしもの（越後金澤型式）である。

鴻町砂丘上の遺跡を平面的分布から見てみると遺跡が集中しているのは鴻町周辺である。鴻町周辺は砂丘（新潟砂丘砂層）の標高も高く、かつその幅も広い。反面、砂丘（新潟砂丘砂層）が相対的に低く、かつ幅の狭い上下浜駅から柿崎川河口までと土底浜駅から直江津にかけては遺

跡の数は極端に減少している。日本道路公団のボーリング資料等によれば、古砂丘の北東から南西方向の高低は、潟町付近で一番標高が高く、上下浜駅付近及び土底浜駅付近から順次高度を下げる傾向がある。柿崎川右岸の市街地及び閑川左岸の五智地内で再び高くなり、新規砂丘のあり方と極めて近似している。潟町周辺の遺跡の分布を詳細に見ると潟湖と潟湖にはさまれた台地状地形の所や潟湖にのびる半島状地形の所にあって、いずれも潟町砂層（古砂丘）上に営まれている。遺跡は北西方向から南東方向に並び、現海岸線とは約90度ずれている。おそらく、現地形で標高の高い所の下部に古砂丘が存在しているといえよう。よって、現在遺跡が発見されていない新規砂丘下にも遺跡存在する可能性が多分にあるものと思われ、潟町砂層（古砂丘）のあり方と有機的関連を持っている。

遺跡の立地は個々の遺跡の地理的環境に左右されることは言をまたないが、潟町砂丘内に存在する遺跡のあり方は、新潟砂丘内における遺跡のあり方とは異なっている。発掘調査が実施された遺跡の層序から時代および性格を考えてみると、(A)上都市の善光寺浜遺跡では古砂丘の上に褐色粘土が0.5から1mあり、その上に黒色腐植砂（縄文前期末の遺物包含層）が1m内外、そして新規砂丘砂層が5から6m堆積し、新規砂丘砂層下面から古瀬戸などの骨器が検出されている。(B)吉川町長峰遺跡では古砂丘の上に褐色粘土があり、その上に黒褐色土、黒色土となり、黒褐色土および黒色土から縄文中期前葉および後期の土器や石器の他に古墳時代前期の住居跡が検出されている。(C)柿崎町の大久保遺跡、木崎城跡では新規砂丘砂の間に黒褐色砂があつて、前者からは古墳時代後期（鬼高式併行期）の住居跡や土器類が、後者からは奈良時代末期から平安時代にかけての集落跡が検出されている。また、大潟町の小船津浜遺跡では、現在波によって侵蝕されているが、崖面に製塩土器の堆積層が見られる。少なくとも潟町砂丘における遺跡のあり方は、層位から古砂丘の上に新規砂丘砂がおおいかぶさったもの、古砂丘の上に営まれ、新規砂丘砂を伴わないもの、新規砂丘砂内にあるものの3種に別けることができる。さらに地質学的な面（砂丘そのものの成因、変遷過程など）についてはあまり知識がないために遺跡形成当時の環境復元は十分にできないが、現地形上からさらに分類されるものと思われる。

(1)現海岸線に近接して古砂丘とその上面および背面部に厚くおおいかぶさるように形成された新規砂丘砂からなり、古砂丘上面を被覆する黒褐色ないしは黒色腐植土に遺物が含まれ、前面に海、背面に沖積地を臨むもの〔鍋屋町（縄前）〕、(2)沖積地を臨む古砂丘上にあって、舌状にのびる台地上やその緩斜面ないしは小規模な馬背状地形を呈し、黒褐色ないしは黒色腐植土に遺物が含まれ、新規砂丘砂を伴わないもの〔長峰（縄中・後、古墳）、蛇池・長崎（縄後）、屋敷割（縄前・後）、巻（縄中～後）など〕、(3)古砂丘内陸側の緩斜面から裾部にあって、黒褐色ないしは黒色腐植土に遺物が含まれ、新規砂丘砂を伴わないもの〔内雁子神社裏（平）、朝日池々底（縄中・後）〕、(4)新規砂丘砂内の黒褐色砂バンドに遺物が含まれ、新規砂丘の背面緩斜面上にあるもの〔出羽・九子浜（古墳～平）〕、(5)独立丘状の新規砂丘状の新規砂丘砂内の黒褐色砂バンド

に遺物が含まれるもの〔袖崎城跡(平・中世)〕、(6)沖積地を臨む新期砂丘砂の緩斜面にあって、黒褐色砂バンドに遺物が含まれるもの〔大久保(古墳)〕、(7)現海岸線に近接し、新期砂丘砂内の黒褐色バンドに遺物を含み、前面に海岸を臨むもの〔下小船津浜(中世)、遊子寺浜(平)〕などに分類される。このように砂丘遺跡と呼ばれている遺跡は一様ではなく、個々の遺跡がそれぞれの性格を有しているといえる。

砂丘遺跡の研究は、遺跡形成時の自然環境を復元することに主眼をおかなければならぬが、考古学的追求からのみでは解決できないことが多い。このため理科学的方法(泥炭層のC<sup>14</sup>測定、花粉分析など)を駆使する地質学的な面から協力を得なければならぬ。考古学的には各砂丘ごとの遺跡分布調査を行うとともに、遺跡の年代判定、遺物の包含状況の把握などを十分に行って、そのデーターを提供しなければならないであろう。今後の砂丘遺跡の研究のみならず沖積地の遺跡の研究には地質学的分野と考古学的分野の協力は必要欠くべからざるものであり、協力することによって、個々の遺跡の性格などが一層明らかにされるであろう。

## 2. 遺構・遺物について

**遺構** 検出された遺構は掘り込み状遺構、ピット、溝、火葬骨埋納穴で、遺構確認面および内部充満土から最底2種に大別される。新期砂丘砂上から掘り込まれ、内部に新期砂丘砂が詰まっていたものは掘り込み状遺構、1号溝、ピット(2~4)で、同一時期に埋没しないしは埋めたものと思われ、中世から近世の範囲には入るものであろう。2号溝・ピット(1・5~48)は縄文から古代の範囲には入るものであろう。鯛ヶ池の集落はかって本遺跡の南側にある神社を中心として南北に営まれていたといわれている。また、瑞天寺は大同3年、弘法大師によって開基されたといわれ、文明年間に焼失し、寛永10年に乘園寺第2世在庵宗朔禪師によって再度開山され、現在に至っているといわれている(越後頸城郡誌稿刊行会 1969)。本遺跡出土の遺物の一部はこれらの歴史的事実や伝承と有機的関係を有するものかとも思われるが、今後の調査・研究に期待したい。

**遺物** 今回の調査で検出された遺物は縄文時代、歴史時代のものである。縄文時代の土器は前期後葉から晩期中葉に至る各時期のものがみとめられる。前期後葉では諸國C式、鍋屋町式が出土し、袖崎町鍋屋町遺跡と同じ傾向が感じられる。中期の土器は非常に少なく、新崎、上山田式の胴部片、大木9式の胴部片が目立つ程度で、文様のはっきりしたものはほとんどない。中期末から後期初頭にかけては、この時期に多い刺突を充填する壺形土器と平縁に沿って沈線を引く砲弾形の深鉢土器片があり、後期前半では関東地方の堀之内1式系のものが出土している。後期後半になると加曾利B式系、東北地方の新地式系、東海・中信地方に分布する中ノ沢式など各地のものがはいっている。晩期は粗雑な感じのする大洞B~C<sub>2</sub>式併行の土器がある。石器は砥石を除いていずれも縄文時代のものと考えられるが、時期別にはとらえられな

い。ただ、縄文時代の一般的な器種の多くが少量ながらそろっていることは注目してよいであろう。

一方、歴史時代の遺物も縄文時代と同様一時代に集中することなく、いくつかの時代、時期にわたっている。古代では6・7世紀段階と平安時代前半期のものがあり、中世以降では13世紀から一部18世紀頃までのものを含んでいる。13～15世紀段階では珠洲系陶器が主流を占め、16世紀以降では施釉陶器が目立つ。このうち、類品にとぼしい施釉の措鉢は底部内面に使用にともなうと考えられる磨滅がみられるが、普遍的に使用される日常品とは思われない。併出した鉄製提子と、これらと同時期と考えられる銀鍍金の環とともに一定の階層を想定させる遺物といえよう。

今回の出土遺物は発掘面積に対して少量で、しかも多くの時代、時期にわたっている。このことは遺跡の性格にもかかわる問題であるが、ひとつの特徴として指摘できる。

### 3. ま と め

新潟県下における縄文遺跡の研究は、丘陵部を中心にして早くから着目され、調査及び研究がなされてきた。しかし、砂丘部の調査・研究は立ち遅れ、近年の開発ブームによる採砂によって新たに発見されるケースが多くなってきており、本遺跡の発見もその例にもれず道路法線発表後の採砂によって発見されたものである。

本遺跡は新期砂丘砂層におおわれた鴻町砂層上に営まれているが、遺構・遺物の検出状態から調査対象地は遺跡の中心部からはずれているものと思われる。おそらく遺跡の中心部は調査対象地の東側にあって、北西から南西にのびる馬の背状の南西緩斜面にあるものと思われ、東側に渦を臨んでいたものと推定される。また、調査対象地内の西側で確認された崖面(図版第5図)は人為的とは言い得がたく、今度の地質学的研究にゆだねたい。検出された遺構は大略2時代に分けられるが、その時代や性格を明確に把握することはできなかった。出土遺物からは縄文・古墳・平安・中世・近世のものがある。いずれも破片となって単発的に出土し、層位的にも混在している。さらに、これらの土器は細分される。即ち、本遺跡は時代的には分断しているものの、同一地点ないしは同一範囲の中で人間生活が営まれていたと判断される。

出土遺物で主体を占めるものは縄文期のもので、この中で量的に多いものは後期末から晩期前葉の土器である。該期の土器は、鴻町砂丘に於ては数少ないもので今後注目しなければならないものであろう。また、新期砂丘砂層の黒褐色砂のバンドをはさんで上位と下位に2分されるといわれている(高田平原団体研究グループ・米山団体研究グループ・妙高団体研究グループ 1972)が、層位的擾乱がない本遺跡ではこのバンドは見られず、出土遺物の下限を示す近世陶磁器等から近世前半以後に砂が埋積されたものと推定され、周辺の地質学的研究に期待したい。

表 1. ピット計測値一覧表

(単位 cm)

ピット No.	長 径	短 径	深 さ	備 考	ピット No.	長 径	短 径	深 さ	備 考
1	398	198	25.8	不整	25	148	126	42.1	椭円
2	294	292	33.9	不整	26	78.0	46.0	31.1	椭円
3	128	50.0	25.9	椭円	27	38.0	32.0	20.4	椭円
4	134	126	29.6	椭円	28	22.0	22.0	5.90	円
5	236	174	18.9	椭円	29	50.0	30.0	7.80	椭円
6	120	118	29.7	円	30	48.0	38.0	25.7	椭円
7	58	50.0	18.3	椭円, 繩土	31	26.0	24.0	22.9	円
8	26.0	18.0	7.50	椭円	32	178	142	42.3	方
9	58.0	54.0	10.5	椭円	33	32.0	30.0	17.9	円
10	64.0	20.0	12.7	椭円	34	48.0	32.0	11.0	椭円
11	130	122	31.3	椭円, 二重 縄土	35	56.0	32.0	24.2	椭円
12	38.0	34.0	19.9	円	36	128	114	14.8	不整
13	44.0	44.0	24.1	円	37	72.0	72.0	27.0	円
14	34.0	22.0	19.1	椭円	38	58.0	49.5	15.8	椭円
15	38.0	28.0	12.3	椭円	39	200	100.5	14.0	椭円
16	50.0	38.0	19.8	椭円, 二重	40	370	80.4	35.8	椭円
17	40.0	28.0	15.8	椭円	41	89.0	85.0	35.1	椭円
18	34.0	42.0	17.2	椭円	42	68.0	59.0	25.2	椭円
19	214	98.0	35.7	椭円	43	68.0	52.0	22.5	椭円
20	230	150	33.4	椭円	44	118	85.0	14.1	椭円
21	20.3	14.8	19.5	椭円	45	104.5	88.4	19.3	方
22	322	302	49.3	不整, 繩土	46	46.0	32.0	27.2	椭円
23	125	68.0	17.3	椭円	47	52.0	44.5	71.9	椭円
24	162	82.0	29.8	椭円	48	50.0	38.0	21.2	椭円

※不整は「不整形」、円は「円形」、方は「方形」、椭円は「椭圆形」の略である。

また、二重は「二重ピット」、縄土は「縄文土器」の略である。

### 〔引用参考文献〕

- ア 安藤文一 1974 「第3章 遺物」『鍋池遺跡』糸魚川市教育委員会
- イ 伊藤信太郎・室岡 博・金子拓男 1970 名立グラバ発見の六個一組の珠洲鏡 (『越佐研究』第35集 新潟県人文研究会)
- エ 越後頃城郡誌稿刊行会 1969 『訂正越後頃城郡誌稿』下巻 富山房
- オ 大場厚順・花ヶ瀬盛明 1976 中頃城郡・西頃城郡の莊保 (『かみくいむし』第23号 かみくいむしの会)
- 岡本郁栄・倉部 周 1972 人頭遺跡から見た新潟砂丘形成史 (『新潟県立西越高等学校研究集録』第1集 県立西越高等学校)
- ゴ 後藤守一 1930 上古時代に於ける上越地方 (†)、附新発見の子持勾玉 (『考古学雑誌』第20卷第9号 日本考古学会)
- 後藤守一 1942 「日本源々岸に於ける砂丘遺跡」『日本古文化研究』河出書房
- タ 高田平原団体グループ 1965 高田平原北部の第四系—高田平原の団体研究Ⅰ (『新潟大学教育学部高田分校研究紀要』第9号 新潟大学教育学部高田分校)
- 高田平原団体研究グループ・米山団体研究グループ・妙高団体研究グループ 1972 上越の地質—とくに米山・妙高火山・高田平野のおいたち (『新潟の自然』第2集 新潟の自然刊行会)
- チ 寺村光清 1960 「第3章 遺物」『鍋屋町遺跡』柿崎町教育委員会
- ナ 中川成夫・加藤晋平・岡本 勇 1967 『兼生遺跡』(立教大学博物館学講座調査報告4) 立教大学博物館学講座
- 中川成夫・加藤晋平・岡本 勇 1966 『兼生遺跡』『頸南—中頃城郡南部学術総合調査報告書』(新潟文化財年報第6) 新潟県教育委員会
- ニ 新潟県教育委員会 1973 「西蒲原郡川崎町大暮遺跡調査報告」『北陸自動車道埋蔵文化財調査報告書』(埋蔵文化財緊急調査報告書第1) 新潟県教育委員会
- 新潟古砂丘グループ 1967 日本海側の古砂丘について (『第四紀研究』第6卷第1号 日本第四紀学会)
- 新潟古砂丘グループ 1972 新潟県の古砂丘と赤い雪 (『新潟の自然』第2集 新潟の自然刊行会)
- 新潟古砂丘グループ 1974 新潟砂丘と人頭遺跡—新潟砂丘の形成史Ⅰ (『第四紀研究』第13卷第2号 日本第四紀学会)
- ヒ 平野田三 1969 頂城の莊園と牧の研究 (『社会科研究紀要』第4集 新潟県社会科教育研究会)
- ミ 宮城県教育委員会 1978 『上深沢遺跡』(東北自動車道調査報告書1) 宮城県教育委員会・日本道路公団
- ヤ 山口 明 1980 繩文時代前期末葉鍋屋町系土器群の動態 (『長野県考古学会誌』第39号 長野県考古学会)
- ミ 吉岡康暢 1977 『珠洲陶の編年をめぐる問題』『珠洲・法住寺第3号窯』石川県教育委員会・珠洲古窯発掘調査委員会



遺跡近景（東から）



遺跡近景（西から）



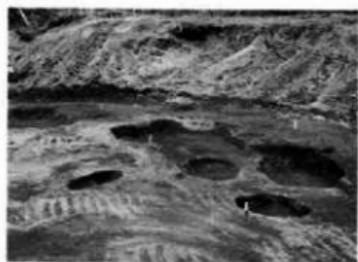
遺構全景（南東から）



2号溝（南から）



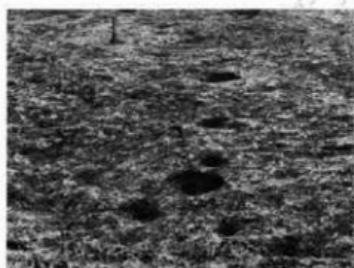
1号溝（南から）



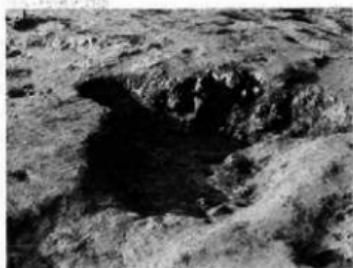
ビット（2～6）



ビット（19, 20, 22）



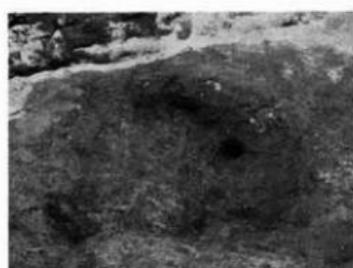
ピット (15~17)



ピット (1)



ピット (10, 11)



ピット (18)



火葬骨埋納穴 (B4)



遺物出土状態 (措鉢・提子)

図版第4図



発掘完了後近景（東から）



発掘完了後近景（北西から）



遺跡北側崖面（西北から）



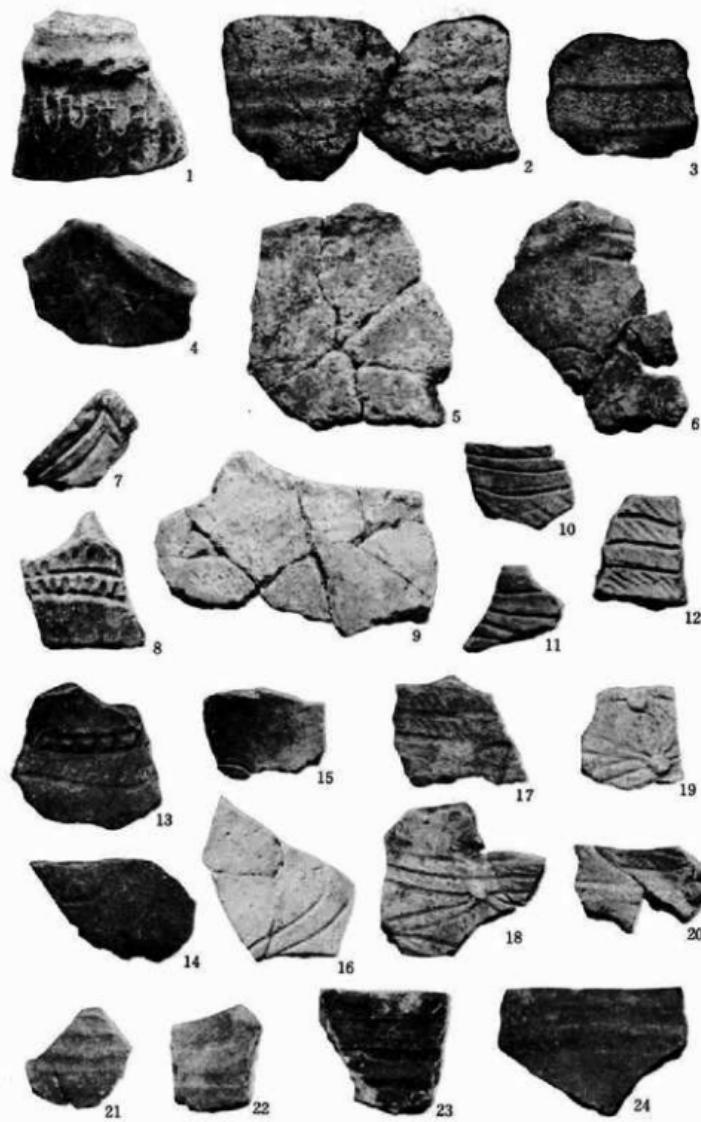
崖面部分（西から）



崖面部分（東から）



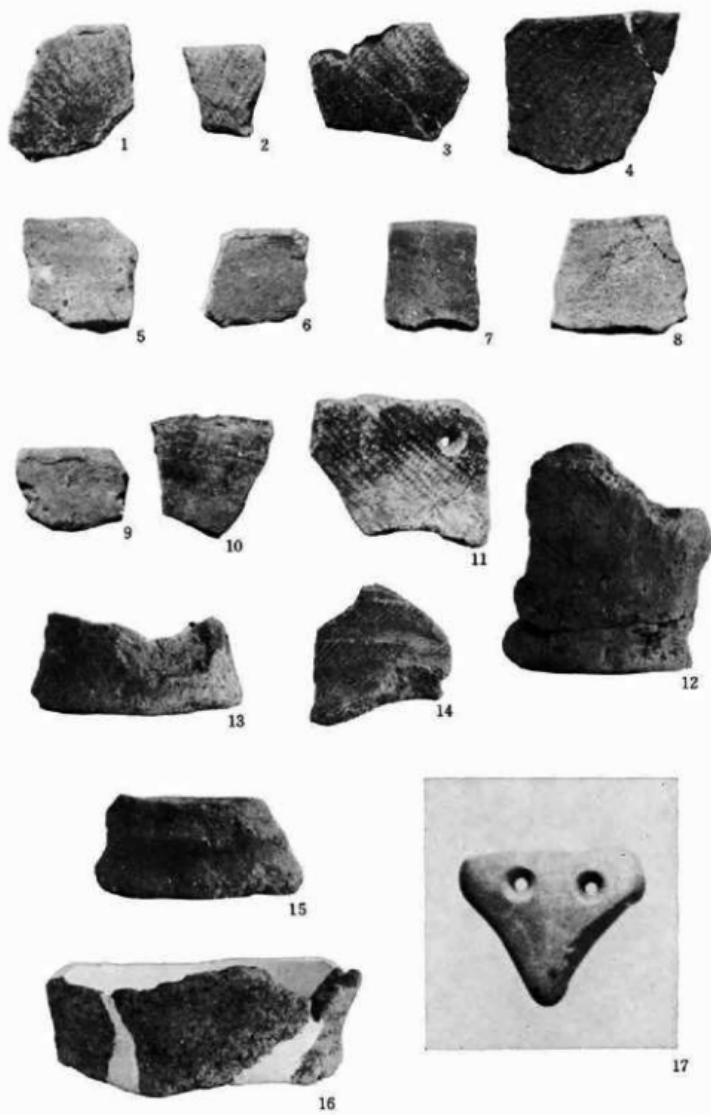
縄文土器



縄文土器

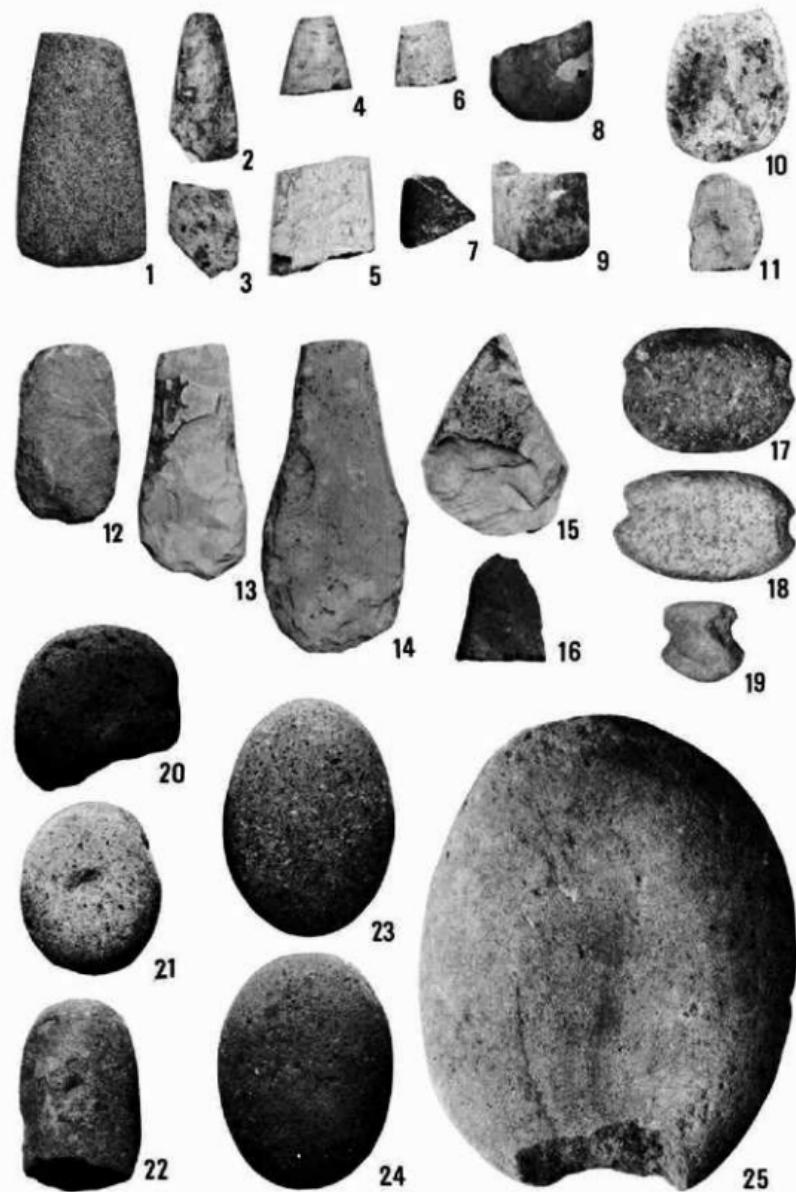


縄文土器

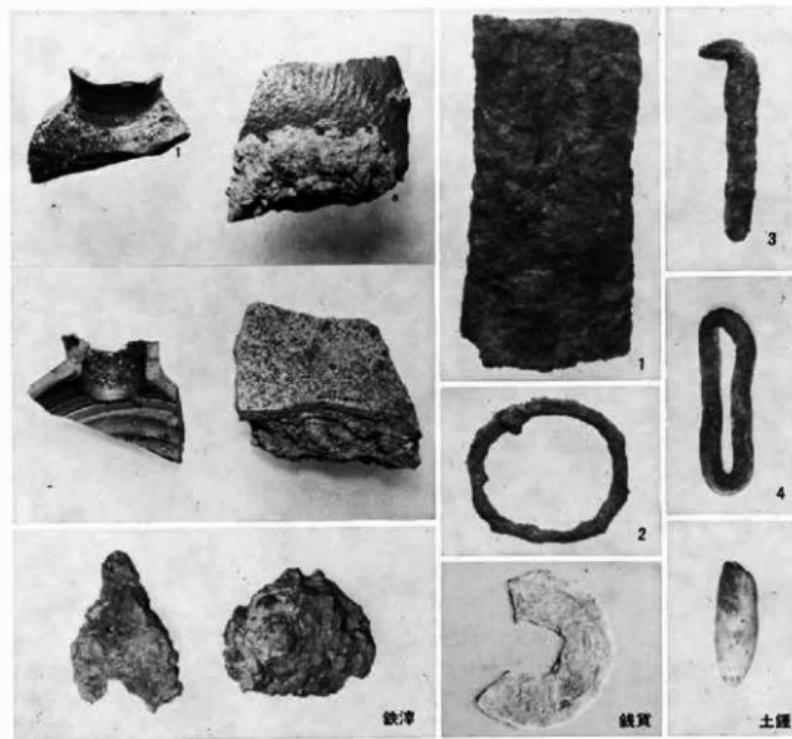


縄文土器・垂飾品

図版第10図

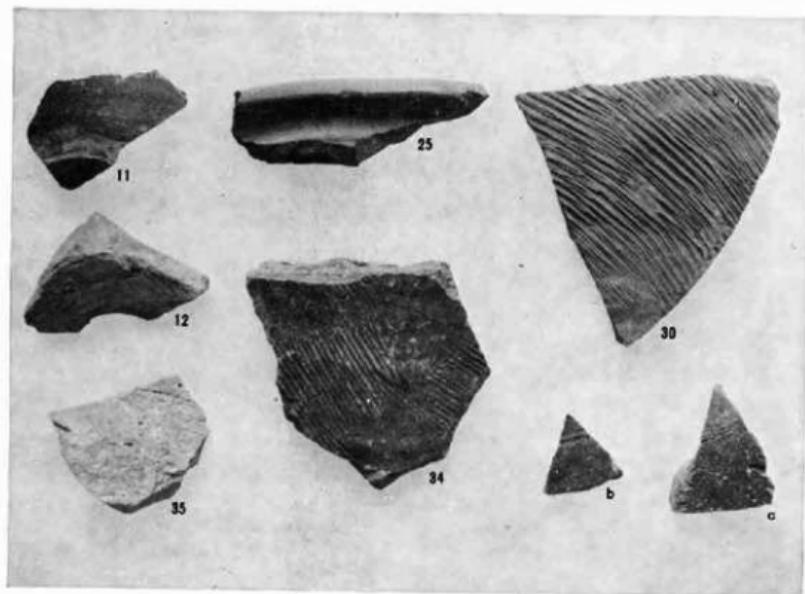
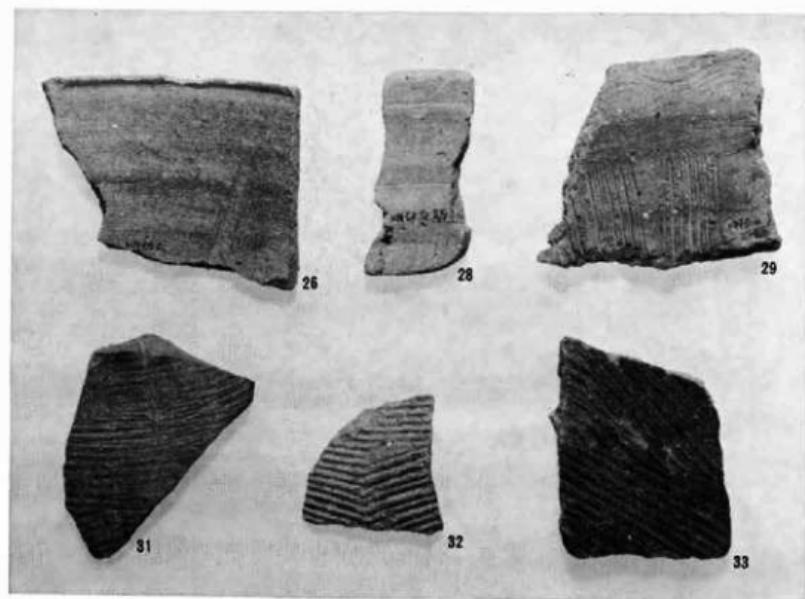


石器 編尺: 3分の1

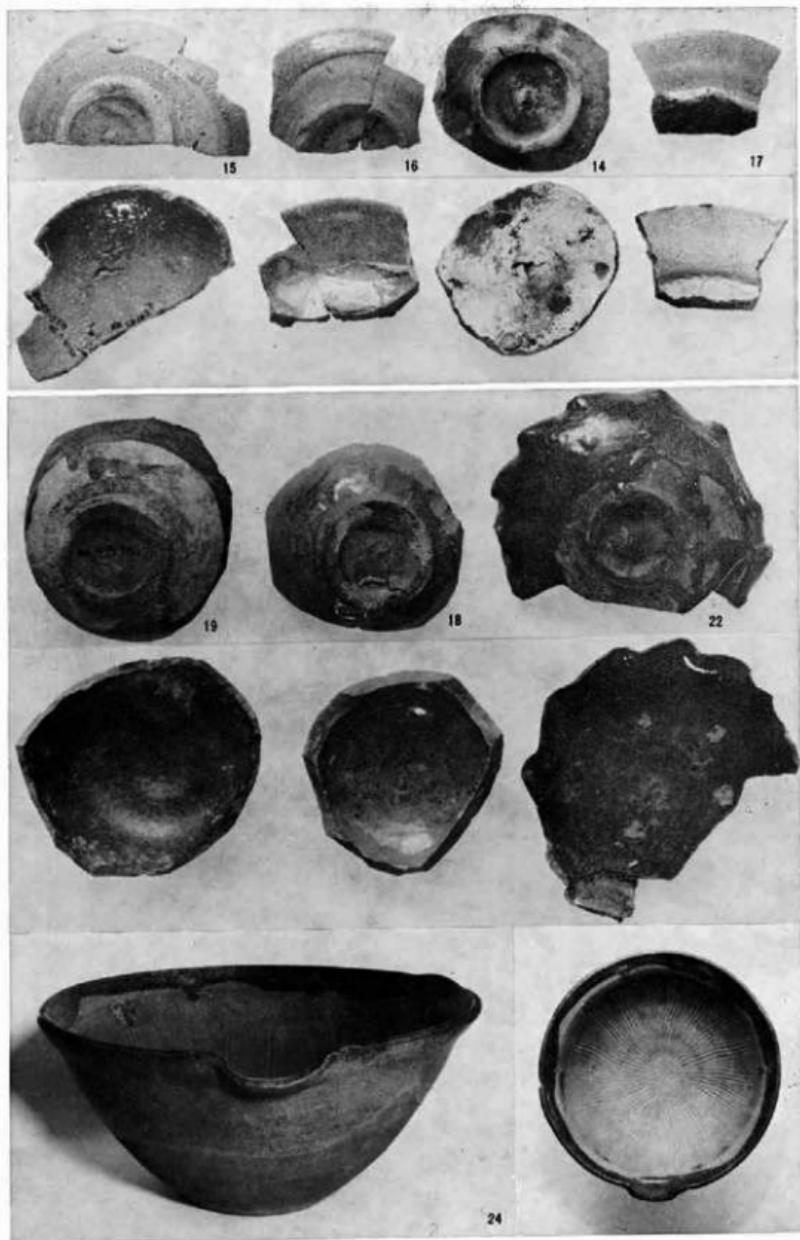


土師器、須恵器、金属器、その他

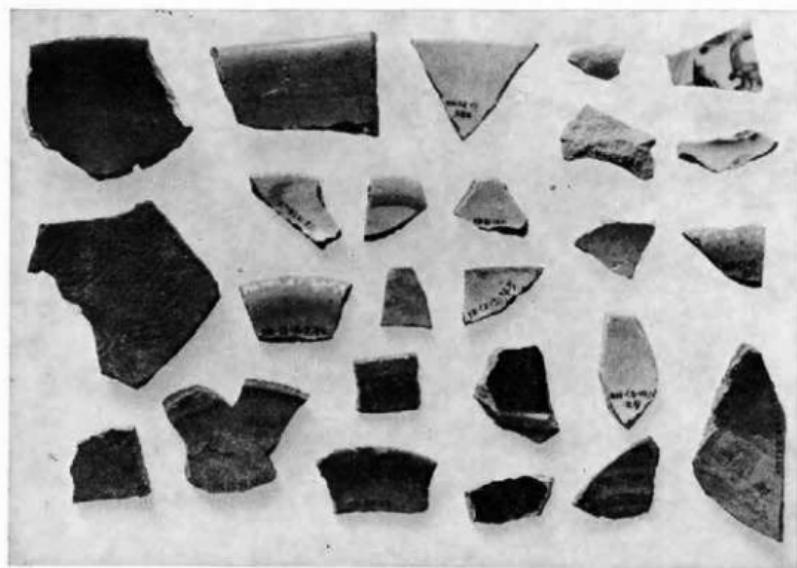
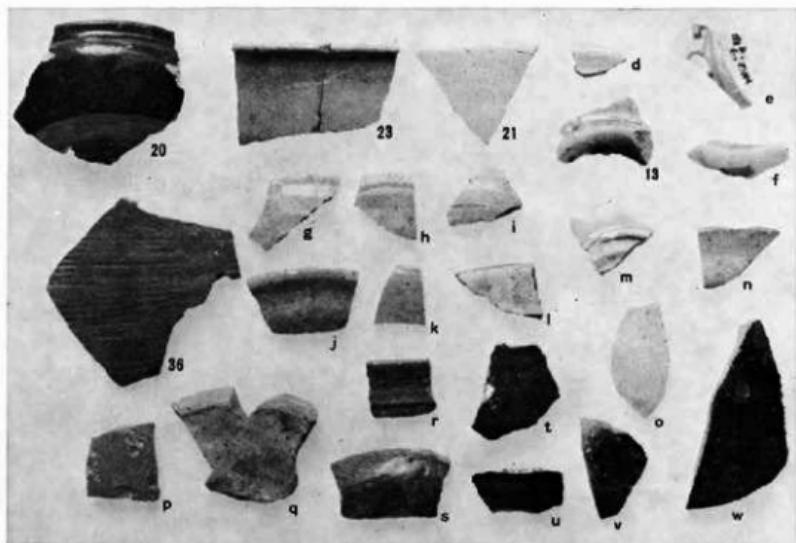
図版第12図



中世陶器



近世陶器



近世陶磁器・その他

新潟県埋蔵文化財調査報告書第25

北陸自動車道

埋蔵文化財発掘調査報告書

御ヶ池遺跡

昭和56年5月31日 印刷

昭和56年6月1日 発行

発行 新潟県教育委員会

印刷 ④長谷川印刷

新潟市学校町通1番町6

TEL 電 3309番